

松江市文化財調査報告書 第176集

宍道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

森屋敷遺跡

平成28(2016)年7月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

宍道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

森屋敷遺跡



平成28(2016)年7月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　　言

1. 本書は、平成 27 年度に本調査を実施した穴道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書の作成は、平成 28 年度に松江市都市整備部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 遺跡の名称・所在地、調査面積は以下のとおりである。

名 称　　もりやしきいせき
森屋敷遺跡
所在地　　しまねけん
島根県松江市穴道町穴道 885-3 ほか
調査面積　302.4m²

4. 現地調査の期間及び報告書作成期間

平成 27 年 10 月 21 日～平成 27 年 11 月 24 日 (発掘調査業務)

平成 28 年 4 月 28 日～平成 28 年 7 月 31 日 (報告書作成業務)

5. 各年度の調査組織

依頼者　松江市都市整備部土木課

主体者　松江市教育委員会　　　　　　　教 育 長 清水 伸夫

【平成 27 年度】発掘調査業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部	長 安田 憲司
	" まちづくり文化財課	課	長 永島 真吾
	" " 専門幹 (埋蔵文化財調査室長兼務)		飯塚 康行
	" " 埋蔵文化財調査室 調査係	係	長 赤澤 秀則
	" " " "	主 任	徳永 隆
		嘱 託	門脇 誠也
調査指導	島根県教育庁	文化財課	主 幹 深田 浩
実施者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団	理 事 長	清水 伸夫
		埋蔵文化財課	長 曾田 健
		" 調査係	係 長 川西 学
		" "	調 査 員 徳永 桃代 (担当者)
		" "	調査補助員 原 英誓

【平成 28 年度】報告書作成業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部	長 藤原 亮彦
	" 次 長 (まちづくり文化財課課長兼務)		永島 真吾
	" まちづくり文化財課 専門幹 (埋蔵文化財調査室長兼務)		飯塚 康行
	" " 埋蔵文化財調査室 調査係	係	長 赤澤 秀則
	" " " "	主 任	徳永 隆
		嘱 託	門脇 誠也

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水 伸夫
埋蔵文化財課 課長 曽田 健
〃 調査係 係長 川西 学
〃〃 調査員 徳永 桃代(担当者)
〃〃 調査補助員 原 英誓

6. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。
木村由希江
7. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。
記して感謝の意を表したい。
- 島根大学法文学部 准教授 平郡達哉(朝鮮系土器)
島根県庁埋蔵文化財調査センター 調査第二課長 守岡正司(中世陶磁器)
島根県庁埋蔵文化財調査センター 調査第二係長 中川 寧(弥生土器)
8. 本書の執筆は第1章を徳永隆(松江市埋蔵文化財調査室)が、第2章第1節と第4章第1節を渡辺正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)が、そのほかを徳永桃代が執筆した。また編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て徳永桃代が行った。
9. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。
- [弥生土器]
松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社
鹿島町教育委員会 1992「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」
- [土師器]
松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相・大東式の再検討」『島根考古学会誌 第8集』島根考古学会
- [須恵器]
大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会
[奈良・平安時代以降の須恵器、土師器、土師質土器]
島根県教育委員会 2013「史跡出雲国府跡9 総括編」
- [陶器・磁器・中世土師器]
大宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV -陶磁器分類編-』
八峰 興 1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究XIII』
九州近世陶磁器学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁器学会10周年記念』
10. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。
また、レベルは海拔標高を示す。
11. 本書における遺構記号は以下のとおりである。
SK: 土坑 P: 柱穴 SD: 溝
12. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

本文目次

例言

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 位置と歴史的景観

　　第1節 遺跡の立地 2

　　第2節 歴史的景観 3

第3章 調査の成果

　　第1節 調査の概要と基本層序 6

　　第2節 自然面 10

　　第3節 第1面 19

第4章 総括

　　第1節 遺物の出土地点と砂州の発達過程 28

　　第2節 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器 28

　　第3節 まとめ 30

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	砂州の発達とラグーンの分布	2	第 19 図	1 区 1 面 遺構配置図	19
第 2 図	調査区断面図と粒度分析結果	2	第 20 図	1 区 1 面 7・8SP 遺構平面・断面図	20
第 3 図	砂州の発達と粒度の変化	3	第 21 図	1 区 1 面 7・8SP 遺構出土遺物	20
第 4 図	森屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡	5	第 22 図	1 区 1 面 3・4SP 遺構平面・断面図	21
第 5 図	調査範囲と開発範囲図	6	第 23 図	1 区 1 面 3・4SP 遺構出土遺物	21
第 6 図	試掘調査 出土遺物実測図	7	第 24 図	1 区 1 面 1・2SP 遺構平面・断面図	22
第 7 図	調査 2 区 平面・断面図	8	第 25 図	1 区 1 面 1・2SP 遺構出土遺物	22
第 8 図	調査 1 区 平面・断面図	8	第 26 図	2 区 1 面より上層出土遺物	25
第 9 図	2 区遺物包含層出土遺物	11	第 27 図	2 区 1 面より上層出土遺物	26
第 10 図	2 区遺物包含層出土遺物	12	第 28 図	2 区 1 面より上層出土 金屬製品	26
第 11 図	2 区遺物包含層出土遺物	13	第 29 図	2 区 1 面より上層出土 石製品	26
第 12 図	2 区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器	14	第 30 図	1 区 1 面より上層出土遺物	27
第 13 図	2 区遺物包含層出土 金屬製品	14	第 31 図	1 区 1 面より上層出土 古錢	27
第 14 図	1 区遺物包含層出土遺物	15	第 32 図	調査スパン毎の遺物の出土状況	28
第 15 図	1 区遺物包含層出土遺物	16	第 33 図	森屋敷遺跡出土の塙町式土器と朝鮮半島系土器	29
第 16 図	1 区遺物包含層出土遺物	17	第 34 図	塙町式土器と朝鮮半島系土器出土遺跡の分布図	30
第 17 図	1 区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器	18	第 35 図	そのほかの遺跡出土の塙町式土器と朝鮮半島系土器	31
第 18 図	1 区遺物包含層出土 金屬製品	18			

挿表目次

表 1.	1 区 1 面 7・8SP 遺構法量表	23
表 2.	1 区 1 面 1～4SP 遺構法量表	23
表 3.	遺物観察表	33

写真図版目次

本文中写真

写真 1.	調査地周辺の様子	1
-------	----------	---

図版 1.	調査開始前状況 (1 区東端から)	図版 7.	2 区遺物包含層出土遺物 (3)
	調査終了状況 (2 区西端から)		2 区遺物包含層出土遺物 (4)
図版 2.	2 区 4SP 土層堆積状況 (北壁)	図版 8.	1 区遺物包含層出土遺物 (1)
	2 区 7SP 土層堆積状況 (北壁)	図版 9.	1 区遺物包含層出土遺物 (2)
	1 区 8SP 土層堆積状況 (北壁)		遺物包含層出土 朝鮮半島系土器
図版 3.	2 区 1SP 檢出状況 (南西から)		遺物包含層出土 金屬製品
	1 区 5SP 檢出状況 (南東から)	図版 10.	1 区 1 面 7・8SP 遺構出土遺物
図版 4.	1 区 1 面 SK05 完掘状況 (北から)		1 区 1 面 1・2SP 遺構出土遺物
	1 区 1 面 P9 條出状況 (南から)		2 区 1 面より上層 出土遺物 (1)
	1 区 1 面 集石検出状況 (北西から)	図版 11.	2 区 1 面より上層 出土遺物 (2)
図版 5.	1 区 7SP1 面 完掘状況 (南から)		1 区 1 面より上層 出土遺物
	1 区 3SP1 面 完掘状況 (東から)		2 区 1 面より上層 出土 石製品
図版 6.	試掘調査出土遺物		1 面より上層出土 金屬製品
	2 区遺物包含層出土遺物 (1)		
	2 区遺物包含層出土遺物 (2)		

第1章 調査に至る経緯

松江市宍道町宍道地内において、老朽化により施設の刷新が必要とされた松江市宍道支所及び宍道公民館を併設する新たな「宍道複合施設」の建設が、平成28年3月の竣工を目指して計画された。これに先立ち、この施設への北側からの進入路や災害時の避難路等を確保するため、地元要望もあったことから、松江市により施設に接続する市道の新設工事が併せて計画された。

この市道新設計画範囲において、平成27年6月に埋蔵文化財の有無照会が松江市教育委員会へなされた。これを受けて松江市まちづくり文化財課において、当該事業範囲における遺跡の有無を判断するため、同月に試掘調査を実施したところ、事業予定範囲に設定した試掘調査トレーンチの各所において古代～中世の遺物が多数検出され、当該地の全域には遺跡が存在することが確認された。このため、平成27年7月に隣接する「森屋敷遺跡」の範囲の広がりが確認されたものとして、当該地も周知されることとなった。

この結果を受け、事業者と協議を行ったが、事業計画の変更は困難であるとの判断に至り、平成27年8月に松江市から発掘通知が提出され、この内容について、県教育委員会と協議した結果、事業範囲について発掘調査の勧告を受けたことから、同年10月から当該遺跡の本発掘調査を実施するに至ったものである。



写真1. 調査地周辺の様子（手前が宍道駅、左奥は宍道湖）南から

第2章 位置と歴史的景観

第1節 遺跡の立地

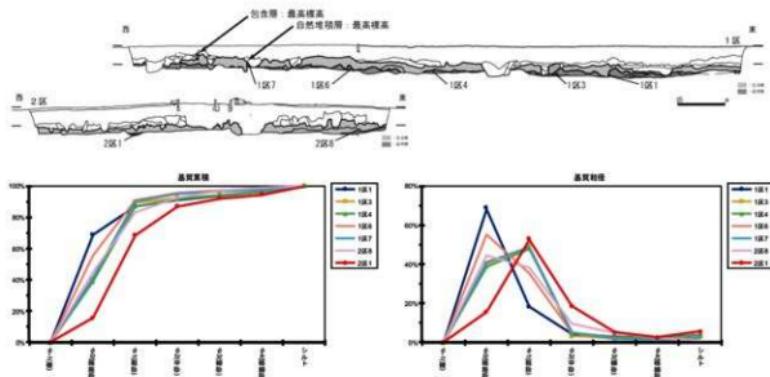
森屋敷遺跡は、宍道町宍道 885-3 ほかに所在する。

本遺跡は、地形分類図（第4図）によれば、佐々布川と小川の成す、南西から北東に延びる砂州上に立地する。今回の調査では、遺物包含層から弥生時代中期以降の遺物が検出されていることから、湾口砂州（あるいは海底砂州）上面が「弥生の小海退」期に完全に陸化し、土壤化を受けることによって、クロスナ（ここでは遺物包含層）が発達したものと考えられる。また、佐々布川と小川の流域に広がる谷底平野は、この砂州によって宍道湖から隔離されたラグーンが埋まってきたものである（第1図）。さらに、調査区断面（第2図）で明らかなように、現地表面、包含層上面、及び



第1図 砂州の発達とラグーンの分布

自然堆積層上面の標高が1区西部で高く、1区東方向、2区西方向に向かい低くなる。したがって、丘陵地に近い遺跡の東側には、ある時期までラグーンの端部が存在していたことが予想される。また、砂州の西側に「昭和」の地名があるように、昭和期の干拓（埋め立て）地が広がっており、干拓（埋め立て）以前には、砂州（あるいは遺跡）の西端がそのまま宍道湖に接していたことが示唆される。



第2図 調査区断面図と粒度分析結果

山田・高安（2006）によれば、宍道湖は斐伊川ファンデルタの発達によって約6,000年前に形成された。斐伊川本流は、東流するまで「神門水界」を経て大社湾に流れている。一方、東流以前でも斐伊川分流の幾つかは東流しており、これらの成す三角州によって斐伊川平野は東に拡大を続けていたとも考えられる。したがって、宍道湖が形成されて以降、宍道湖内での潮流は、東への流れが卓越していたものと考えられる。これらの事柄から、本遺跡の立地する砂州は、西から東へと拡大してい



第3図 砂州の発達と粒度の変化

基質（砂粒部）の粒度分析結果では、何れの地点も、砂丘（あるいは河口部）で特徴的に認められる粒度特性である、1つの鋭角なピークを持つ（第3図）。これらのピークの位置を概観すると、調査区域の東部が粗粒で、西部ほど細粒を示す傾向にある。更にピークの推移を詳細に見ると、粗粒～細粒の推移が少なくとも3度（1区1～、1区6～と2区8～）認められる。一般に砂州の中心部は粗粒で、縁辺部が細粒を示すことから、調査範囲内では砂州に少なくとも3回の発達時期があり、砂州が西側に発達していくことが示唆される（第3図）。

第2節 歷史的景觀（第4図）

縄文時代における森屋敷遺跡は、このころの海進によって広がった古宍道湖の湖岸付近、あるいは湖底であったと考えられる。¹⁾周辺に縄文時代の遺跡は少なく、森屋敷遺跡の南東側の丘陵地Ⅱにおいて標高約90mのところに位置する野津原Ⅱ遺跡(59)で縄文草創期の有舌尖頭器が出土しているほか、落とし穴が見つかっている程度である。

弥生時代では、前期の遺跡は確認されておらず、もっとも古いもので丘陵地Ⅰに位置する上野Ⅱ遺跡(93)があり、後期の土器とともに松本Ⅱ-1様式にあたる中期前葉の土器が加工段（標高約56m）から1点出土している。また、丘陵地Ⅱの縁辺部に位置する白石大谷Ⅰ遺跡(17)では、段状遺構（標高約10～15m付近）などから中期後葉から後期の土器が出土している。平成26年度に穴道複合施設の建設に伴い調査をした森屋敷遺跡²⁾(2)でも、松本Ⅲ～IV期にあたる中期後半の土器が数点出土（標高2m付近）しているが、現在までに確認されている中期にかけての遺跡はわずかである。後期になると、丘陵地Ⅱにあたる野津原Ⅱ遺跡(59)、山守免遺跡(60)、上野遺跡・上野Ⅰ遺跡(87)、上野Ⅱ遺跡(93)などで、竪穴建物跡などが確認され、集落の明らかな存在が判明している。以上のように、後期を中心に標高の高い位置に集落跡が多く確認されている。

古墳時代の遺跡は、丘陵地Ⅱを中心に古墳・集落跡が確認されている。森屋敷遺跡周辺の古墳では、穴道要害山古墳(47)、隨音寺横穴墓群(42)、横町横穴墓群(44)などが存在する。集落跡は、堤平遺跡(63)、上野Ⅱ遺跡(93)、矢頭遺跡(69)、山守免遺跡(60)で見つかっている。また、能登堀遺跡

跡(40)では、集中的に土器が廃棄された溝状遺構を検出しており、祭祀跡の可能性が指摘されている。

古代においては、『出雲国風土記』に穴道の地名伝承や祭祀跡の犬石・猪石(14)の記述が見られる。また、佐々布付近に意宇郡穴道駅が置かれ、古代山陰道が穴道湖岸に平行するように存在したことが推察されている。³⁾ 荻田遺跡(106)、堤平遺跡(63)では、鉄滓と轆羽口の出土から、鉄鍛冶を行っていたことが判明し、さらに仏教関連遺物の出土も確認され、地方への仏教の浸透を示すものである。⁴⁾

中世では、白石大谷I遺跡(17)で、古道やピットなどから12世紀から14世紀にかけての貿易陶磁器や国産陶器などが出土している。また、白石大谷II遺跡(19)では、建物跡と思われる加工段から中世土師器が出土しており、貿易陶磁を伴わないと豪族の居館ではなく、一般集落跡と考えられている。⁵⁾ この二つの遺跡は、弥生時代から存在している。能登堀遺跡(40)では、石組遺構のなかから中国製青磁碗片とともに石製の硯が出土しており、何らかの有力者の施設が存在したことを示唆するものである。⁶⁾

戦国時代には、穴道湖沿岸は尼子と毛利の戦場となり、穴道氏の本拠地とされる金山要害山城後(74)を始め、多くの山城が築かれている。佐々布川のある谷底平野に沿って存在する丘陵地Ⅱ、丘陵地Ⅰに山城が築かれている。

江戸時代は、松江藩領となってからは、山陰道(116)と穴道尾道街道(117)の合流点にあたることから、雲南・山陽方面から陸路運搬されてきた物資を穴道で船に積み替え、穴道湖を通じて松江城下や各地に運ばれ水運が発達したようである。また、山陰道の街道沿いには「本陣」が設けられ、宿場町が形成された。現在も宿場町の町割りが残っており、調査範囲の西側(2区)が、この町割りに該当する。

註1) 中村唯史 穴道町教育委員会 1995『穴道町ふるさと文庫9 穴道湖のおいたち・人と海の交わるところ』

註2) 松江市教育委員会 公益財團法人松江市スポーツ振興財团 2015『松江市文化財調査報告書第162集 穴道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書 森屋敷遺跡』

註3) 池橋達雄 穴道町教育委員会 1998「穴道町西部の古代山陰道をめぐって」『穴道町歴史叢書2』

註4) 西尾克己・稲田信・木下誠 穴道町教育委員会 1998「出土品からみた荻田遺跡の性格」『穴道町歴史叢書3』

註5) 林健亮 日本道路公団中国支社 烏根県教育委員会 2000「第4章 第4節 第2項 中世の白石大谷II遺跡について」

『勝負魁I遺跡・白石大谷II遺跡・シトギ免遺跡・野津原II遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』

註6) 松江市教育委員会 財團法人松江市教育文化振興事業団「V. 小結」『松江市文化財調査報告書第126集 能登堀遺跡発掘調査報告書』

参考文献

1. について

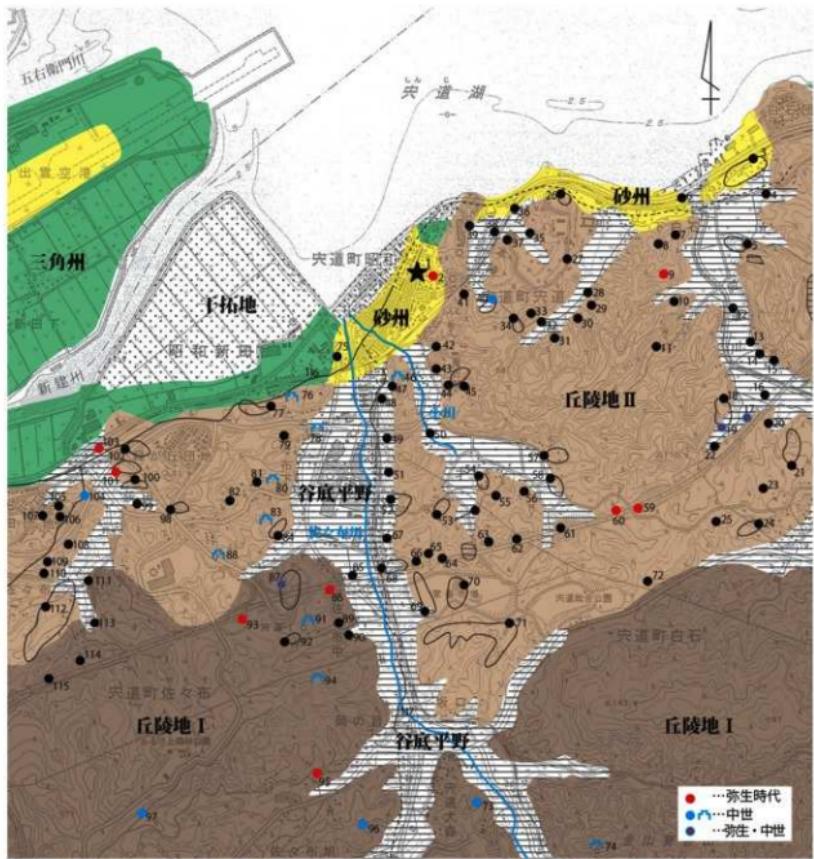
鳥根県 1973『恵譽・今市』『5万分の1都道府県土地分類基本調査(地形分類図)』

山田和芳・高安克己 2006『出雲平野・穴道湖地域における完新世の古環境変動: ポーリングコア解析による検討』『第四紀研究』45(5), 391-405.

中村唯史 2006『山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷』『第四紀研究』45(5), 407-420.

2. について

鳥根県教育委員会 2003『増補改訂 鳥根県遺跡地図I(出雲・隠岐編)』



第4図 森屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

1 森屋敷遺跡	21 椎山古墳群	41 上原原遺跡	61 墓崎遺跡	81 中屋敷遺跡	●101 屋敷古墳群
●2 森屋敷遺跡(H26)	22 シトギ免遺跡	42 陸音寺横穴墓群	62 香田遺跡	82 大畠ヶ遺跡	102 ヴィノム古墳群
3 下白石遺跡	23 上後ケ市遺跡	43 八斗久保遺跡	63 堤平遺跡	●83 土居郭群跡	●103 北ヶ市遺跡
4 平井遺跡	24 鶴田遺跡	44 横町横穴墓群	64 舟川原遺跡	84 西屋敷遺跡	●104 長畠古墳群
5 伊賀見古墳群	25 下倉橋穴墓群	45 横町遺跡	65 君畠遺跡	85 石地藏遺跡	105 小界古墳群
6 後原遺跡	26 香の木遺跡	46 宍道要害山城跡	66 女夫岩遺跡	●86 竹ノ崎遺跡	106 莘田遺跡
7 奥遺跡	27 伝塩治高員古墳	47 宍道要害山古墳	67 OM公園横穴墓	●87 上野遺跡・上野Ⅰ遺跡	107 瀬平遺跡
8 苫古墳	28 カシヤク古墳	48 横庭遺跡	68 女夫河西遺跡	●88 城山城跡	108 佐々布森遺跡
●9 斎遺跡	29 小昭庭遺跡	49 西代遺跡	69 矢頭遺跡	89 矢谷下遺跡	109 小佐々布古墳群
10 熊江遺跡	30 後谷横穴墓	50 六反田遺跡	70 清水合古墳群	90 教手遺跡	110 鹿田遺跡
11 空遺跡	31 元渠横穴遺跡	51 長庭古墳	71 水溜古墳群	●91 上野城跡	111 北ノ堀遺跡
12 長畠遺跡	32 山の神谷横穴墓	52 桂原遺跡	72 女ノ輪横穴墓	92 矢谷上遺跡	112 ソラ田遺跡
13 坪の内古墳	33 岩口横穴墓	53 才橫穴墓群	●73 金山五輪塔群	●93 上野Ⅱ遺跡	113 野添遺跡
14 大石・猪石	34 打越遺跡	54 向原遺跡	74 金山要害山城跡	●94 佐々布要害山城跡	114 御崎谷遺跡
15 坪の内遺跡	35 深坪遺跡	55 才古墳	75 加茂分遺跡	●95 平田遺跡	115 センガ遺跡
16 畜形遺跡	36 小宮田遺跡	56 佐賀利遺跡	●76 指屋山城跡	●96 大森経塚	116 近世山陰道
●17 白石大谷Ⅰ遺跡	37 庄遺跡	57 外垣内遺跡	●77 佐々布下古墳群	●97 菩門院跡	117 宍道尾街道
18 イナエソ遺跡	38 向野原遺跡	58 原田遺跡	●78 海部城跡	98 岩六姫遺跡	
●19 白石大谷Ⅱ遺跡	39 下野原遺跡	●59 野津原Ⅱ遺跡	●79 緑音寺横穴墓	●99 鶴崎遺跡	
20 横山遺跡	●40 能登堀遺跡	●60 山守免遺跡	●80 舞舞城跡	100 鶴崎古墳群	

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要と基本層序

1. 調査の概要

試掘調査（第5図）

穴道複合施設への進入路となる開発範囲内で、T-1からT-5の5か所の試掘調査を行い、その結果に基づき調査範囲を確定している。この試掘調査では、古墳時代から近世の遺物が出土しているが、近世以前のものは細片が多く、図化できないものが多い。中世の須恵器（東播系）鉢片や壺器系陶器片も比較的多く認められたが、細片のため図化していない。試掘調査の詳細をここで述べることは省略するが、ここでは図化できた年代を示す特徴的な遺物について紹介したい。

試掘調査出土遺物（第6図）

6-1と6-2はT-2出土遺物である。6-1は古墳時代中期以降の土師器壺である。6-2は江戸時代後期の肥前磁器の広東碗で、九陶V期にあたる。6-3と6-4はT-3出土遺物で、6-3は古墳時代中期の土師器高环である。6-4は古墳時代後期の須恵器高环である。6-5はT-4出土遺物で、古墳時代後期から古代にかけての土師器壺である。6-6はT-5出土遺物の石鉢で凝灰岩質砂岩製である。内外面に被熱痕があり、金属の精錬に使用された可能性も考えられる。

調査の方法（第5図）



第5図 調査範囲と開発範囲図 (S=1:1,000)

試掘調査の結果から、地盤が砂地であり、本調査では当初より湧水による調査区の崩落が懸念されていたため、ある程度の範囲を調査、記録し、埋め戻してから次の範囲を調査する方法をとった。調査区を1区と2区に分け、1区の東から任意で1～8SPまでを設定し、1SPから調査を開始した。1区の調査後、2区の西端から1～8SPまで設定し、1SPから調査を開始した。2区の調査では、比較的高い位置からの湧水があり、調査地両側に民家が存在していることもあり、2区では遺構の検出を断念し、土層の確認と遺物の採取を行った。

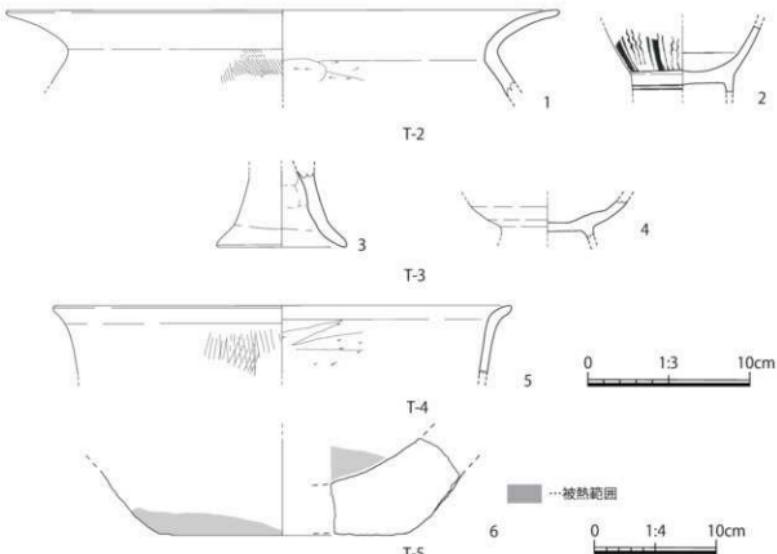
2. 基本層序(第7、8図)

調査区の現地表面の標高は、1区1SPが約3.5m、西に向かってやや高くなり、2区5SPが約3.7mである。調査区西端にあたる2区1SPではまた約3.5mと低くなっている。

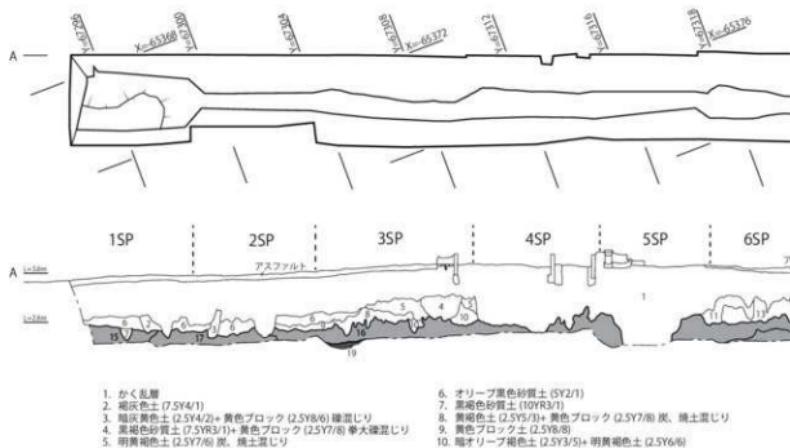
現地表面から約1mほど下までは、近現代のかく乱層があり、それを取り除くと古墳時代から近世にかけての遺物を含む土層の堆積を確認している。この土層の上面では、遺構の検出はできていない。

この土層の下で、弥生時代中期から中世にかけての遺物包含層が認められ、この包含層上面で遺構を検出している。これを第1面と称して調査を行った。1区では遺構をいくつか確認できたが、2区の1SPで第1面の落ち込みを検出したものの、湧水のため、それ以上の確認はできていない。

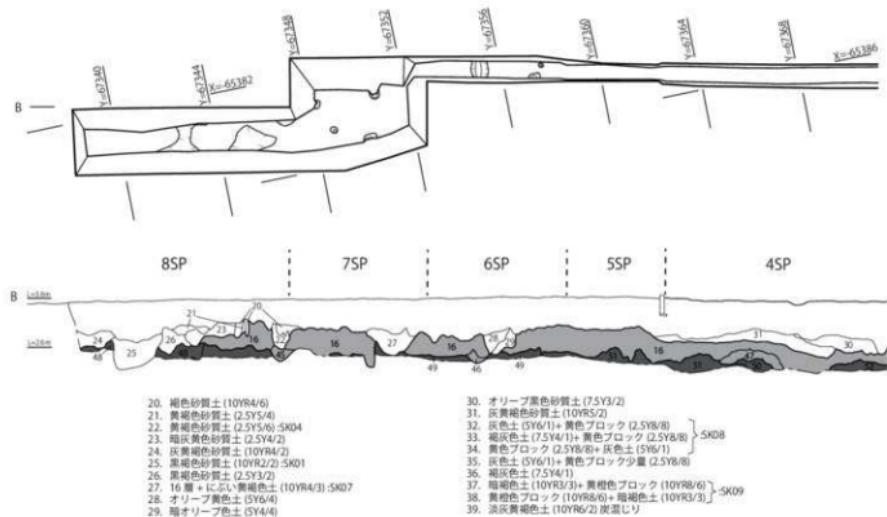
第1面を形成する遺物包含層の下層は、遺物を含まない黄褐色砂層あるいは灰白砂層となっており、佐々布川、小川に由来する自然堆積層と考えられる。以下、この自然堆積層の上面を自然面として、最下層である自然面から説明をしていく。



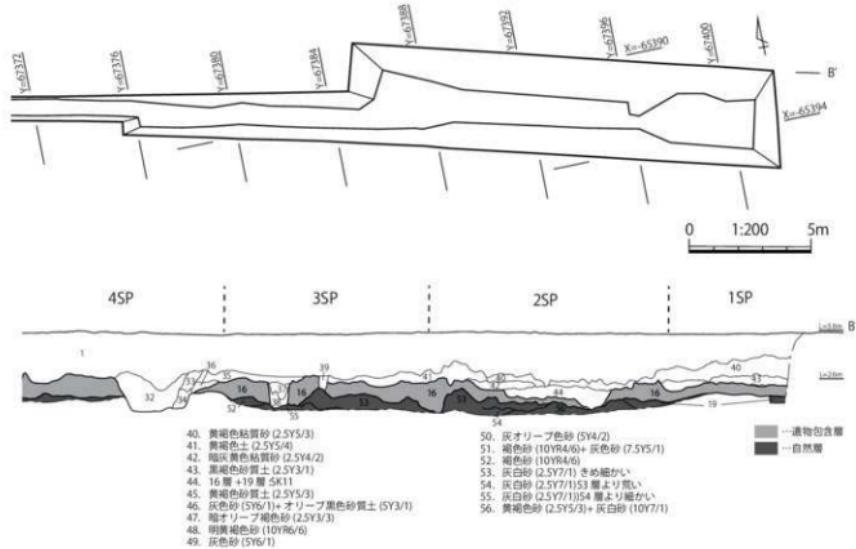
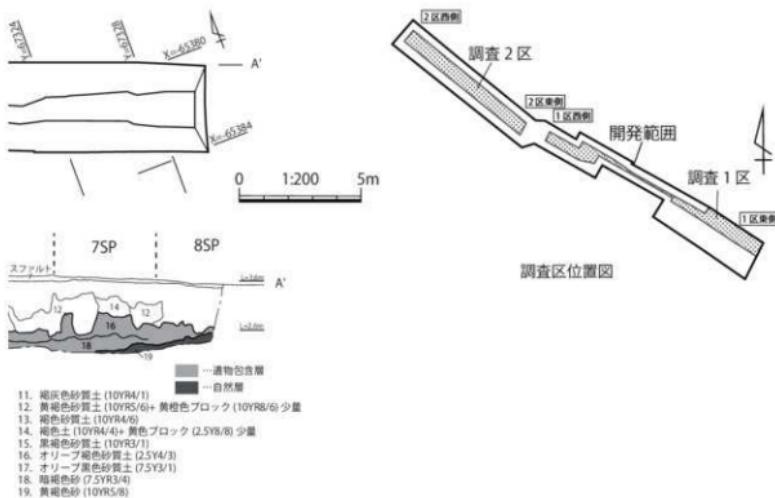
第6図 試掘調査 出土遺物実測図



第7図 調査2区 平面・断面図 (*断面図は縦S=1/100、横S=1/200)



第8図 調査1区 平面・断面図 (*断面図は縦S=1/100、横S=1/200)



第2節 自然面(第7、8図)

調査範囲の西側にあたる2区では、湧水のため、部分的にしか自然堆積層を確認することができない。最も西側にあたる2SPで標高約2.1m、東端にあたる8SPで標高約2.1～2.5mと東に向かって標高が高くなっている。2区では自然面上面での遺構の検出はできていない。調査範囲の東側にあたる1区では、全体的に自然堆積層を確認できている。最東端である1SPで標高約2.3m、最も標高が高くなるのは1区西側にあたる7SPで標高約2.7mである。さらに西側の8SPでは標高約2.6mを測る。1区の自然面では、いくつかの土坑、ピットなどを検出しているが、遺物を含むものではなく、土層の堆積状況から、上層からの遺構の掘り残しがある可能性が高い。

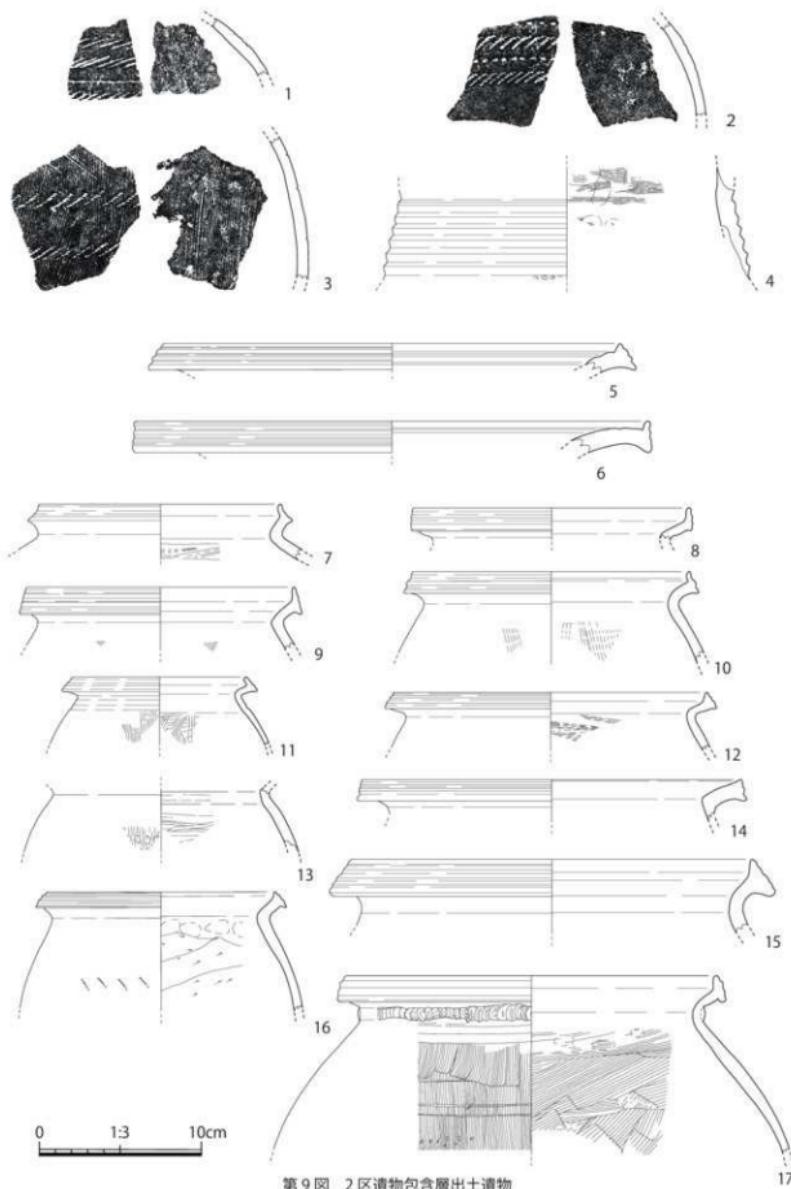
調査1区、2区を通してみると、1区7SPを中心に東西に自然面の標高が下がっており、前章第1節のとおり、1区7SPから東側がラグーンの縁辺、西側が穴道湖の縁辺を示すものと考えられる。

自然面上層に弥生時代中期から中世にかけての遺物包含層が堆積しており、土壤分析の結果、この堆積層が自然面上に堆積した古土壤と判明している。中世の遺物が、遺物包含層の比較的下層からも出土するため、この古土壤が自然にこの場所で堆積したものとは断言はできない。

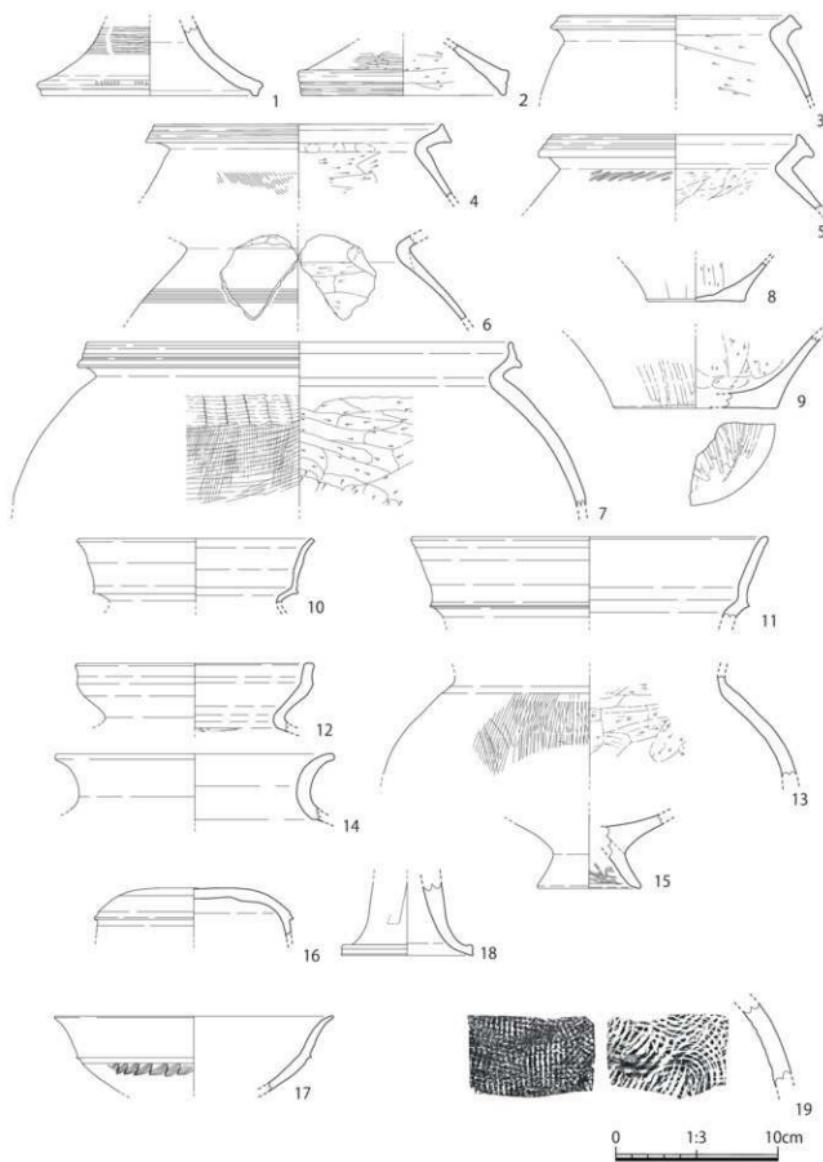
2区遺物包含層出土遺物(第9～13図)

第9図は弥生中期後葉の壺、甕で、松本IV様式にあたるものである。9-1～3は広口壺の肩部あるいは胴部と思われる。9-1は外面に貝殻原体による斜線文を上下に2列、その下に1条の沈線、さらにその下も斜線文を施す。内面はハケ調整の後ナデている。9-2は外面ハケ目調整の後、上部から刺突文、ハケ目原体による斜線文を施す。内面はハケ目調整で仕上げている。9-3は外面ハケ目調整の後、上部からヘラによるおそらく綾杉文が施されたと思われる。その下部はハケ目原体による斜線文が間をあけて2列に施される。内面はハケ目調整で仕上げられる。9-4は広口壺の頸部で、5条の凹線文が施される。9-5～6は広口壺の口縁部で、口縁端部に数条の凹線文、口縁内部にも凹線文が施されている。9-7～17は甕で、いずれも口縁端部に数条の凹線文、内面頸部下部にハケ目が残るものが多い。9-13は外面胴部付近に円形の刺突文が残る。9-16は外面胴部に二枚貝原体による列点文が施される。9-17は頸部外面に指頭圧痕文帯が施され、胴部は縦方向のハケ目調整がされた後、3条の沈線、さらにその下に刺突文が施される。内面は頸部や下側から斜め方向のハケ目が良く残る。

第10図は弥生中期から後期、古墳時代にかけての土器、須恵器である。10-1は弥生中期後葉の高環の脚部で、松本IV様式にあたる。10-2は弥生後期前葉の高環の脚部で、松本V様式にあたる。脚端部に凹線文が施される。10-3～7は弥生後期前葉の甕である。松本V様式にあたる。10-8、9は弥生土器甕の底部である。外面に縦方向のヘラミガキが施される。10-10、11は複合口縁をもつ弥生時代後期後葉の甕である。松本V様式で、10-10は草田編年4あるいは5期にあたるもの、10-11は草田編年3あるいは4期にあたると思われる。10-12は古墳中期前半の土師器甕で、松山編年ⅡあるいはⅢ期のものである。10-13も口縁部が欠損しているが、胎土やハケ目の様子から古墳時代中期の土師器甕で良いと思われる。10-14は単純口縁をもつ古墳時代中期の土師器甕である。10-15は古墳



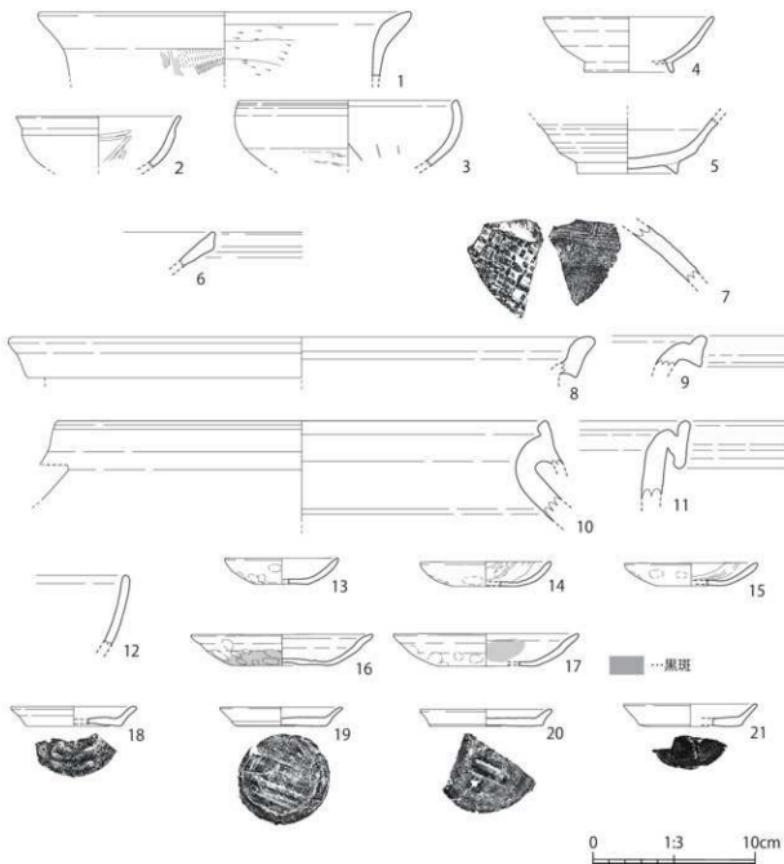
第9図 2区遺物包含層出土遺物



第10図 2区遺物包含層出土遺物

時代の製塙土器と思われる。10-16は須恵器の蓋環の蓋で、出雲1期の古墳時代中期のものである。10-17は須恵器で無蓋高环の坏部である。出雲1～2期の古墳時代中期のものである。10-18は須恵器の高环の脚部である。出雲4～6期で古墳時代後期のものである。10-19は須恵器の甕である。

第11図は古墳時代から中世にかけての土器、須恵器、陶磁器である。11-1は古墳時代末から奈良時代にかけての土師器甕である。11-2、3は古代の土師器环と思われる。11-4、5は古代から中世にかけての高台付の环あるいは碗である。11-6は東播系の中世須恵器である。¹¹11-7は中世須恵器の甕である。11-8～11は瓷器系陶器の甕である。13世紀前半から15世紀にかけてのものである。11-12は中国製の青磁碗龍泉窯E類で、15～16世紀代のものである。11-13～21は中世土師器皿



第11図 2区遺物包含層出土遺物

である。11-14～18は手づくねの皿、11-19～21はロクロ成形の皿である。11-19、20は外面底部に回転糸切痕の上に何らかの工具痕が残るものがある。

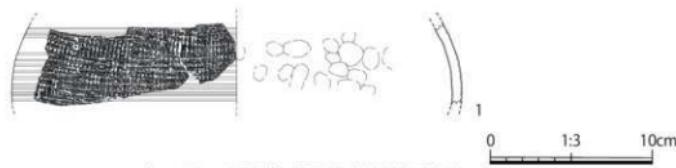
第12図は朝鮮半島系土器の壺の胸部である。外面は格子状タタキの上から、横方向の沈線を施し、内面は當て具の痕跡を丁寧にナデ消している。原三国後半期かもしくは三国時代初頭のものと考えられる²⁾。弥生後期から古墳前期初頭頃にあたる。

第13図は金属製品である。13-1は帶金具であろうか。13-2、3は鉄釘である。

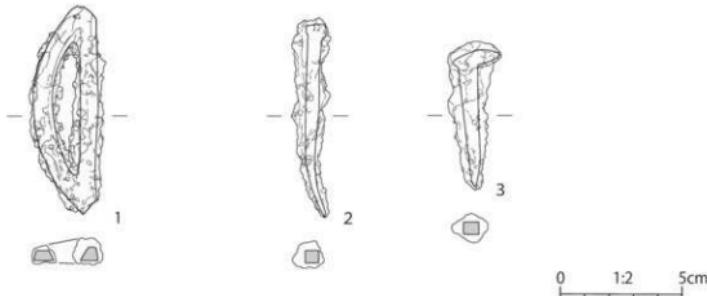
1区遺物包含層出土遺物(第14～18図)

第14図は弥生前期から弥生中期の壺である。14-1は弥生前期の壺で、松本I様式にあたる。弥生前期でも中葉以降のものと思われる。外面胴部上半は上下に配された2条の沈線の間を羽状文で埋めるように施文されている。外面胴部下半は横方向のヘラミガキが施され、底部に近くになる部分は縦方向のヘラミガキが認められる。内面はハケ調整の後、ナデている。14-2、3は弥生中期中葉から後葉の壺で、松本IIIからIV様式のものと思われる。14-4～7は弥生中期後葉の鉢あるいは壺で、松本IV様式にあたる。14-4は外面を目の粗い原体でハケ調整し、小さい原体で押し引きするように沈線を2条施すものである。14-5～7は比較的器厚が薄く、ほかの弥生中期土器に比べると焼成も甘く、やや赤みを帯びたものである。14-8～17は弥生中期後葉の広口壺で、松本IV様式にあたる。

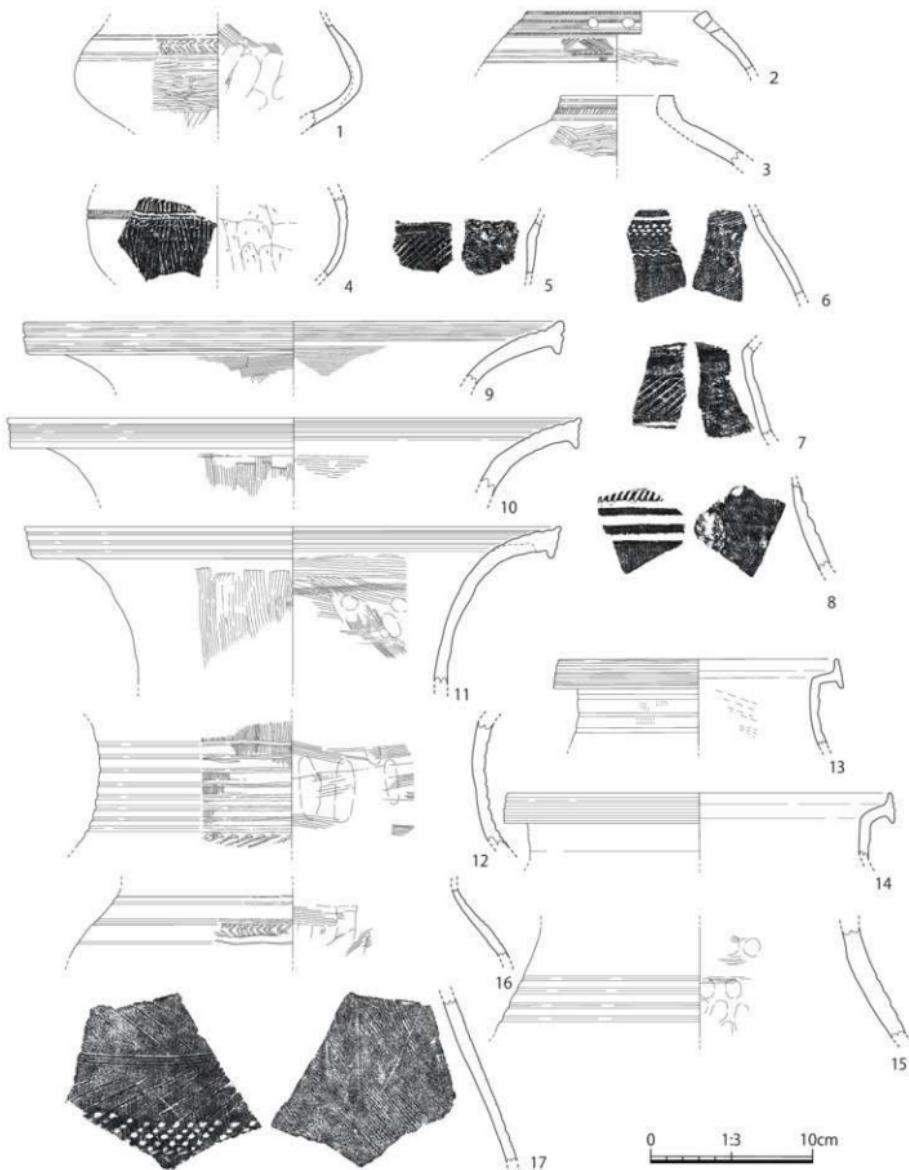
³⁾ 第15図は弥生中期の壺、甕である。15-2は塙町式系の壺あるいは甕で、外面は沈線文との間に刻目が施される。弥生中期後葉にあたる。このほかに掲載していないが、もう1点出土している。そのほかも松本IV様式で、弥生中期後葉のものである。15-16は頸部外面の指頭圧痕文帯が欠損してい



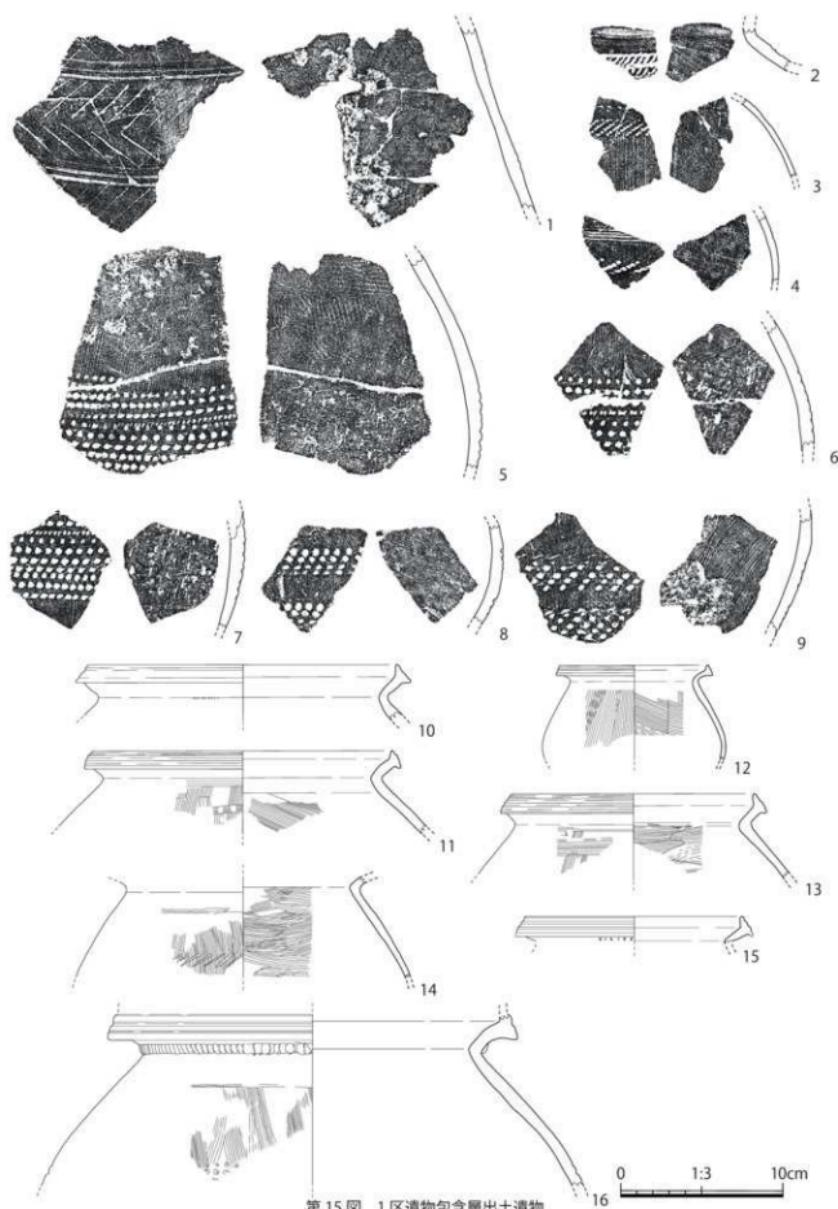
第12図 2区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器



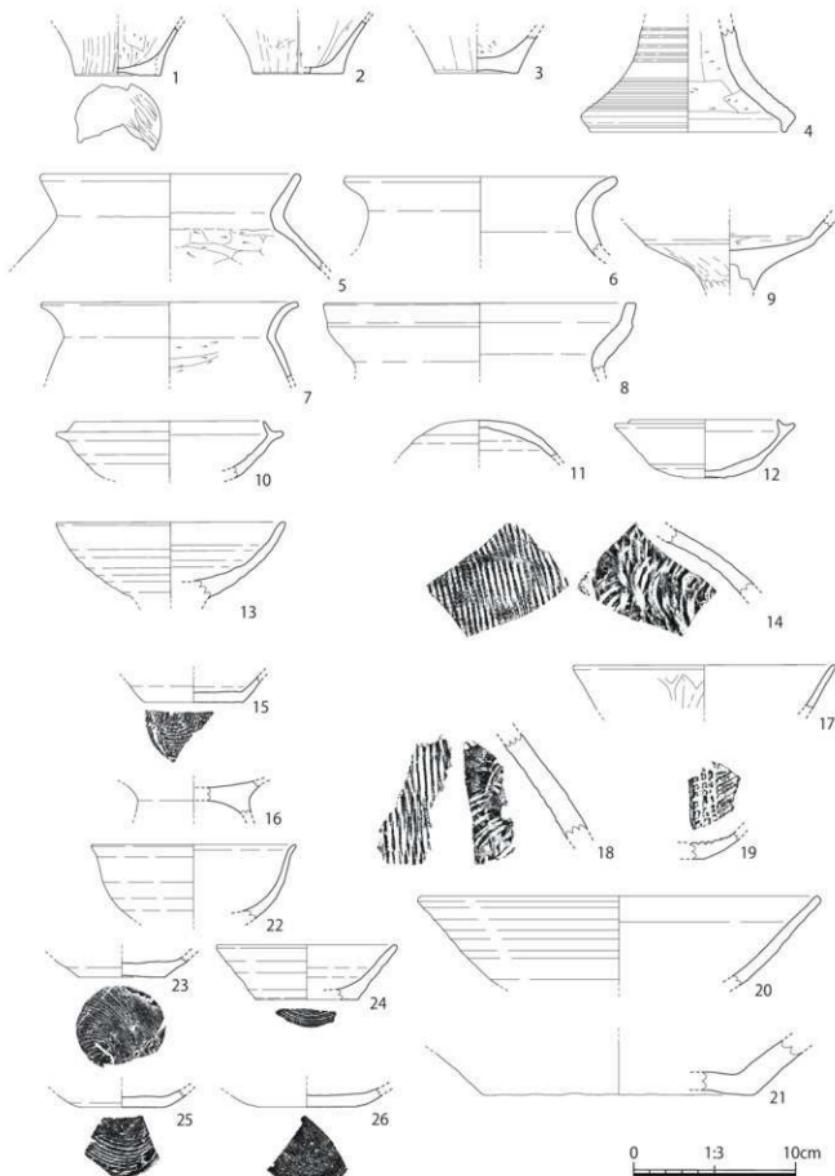
第13図 2区遺物包含層出土 金属製品



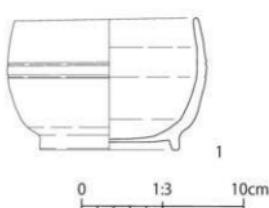
第14図 1区遺物包含層出土遺物



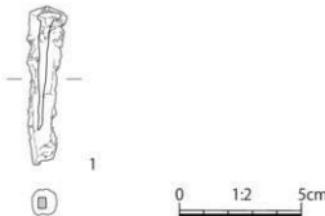
第15図 1区遺物包含層出土遺物



第16図 1区遺物包含層出土遺物



第17図 1区遺物包含層出土 朝鮮半島系土器
る。



第18図 1区遺物包含層出土 金属製品

第16図は弥生時代から中世にかけての遺物である。16-1～3は弥生上器の底部で、外面にヘラミガキが残る。16-4は弥生中期後葉の高坏で、松本IV様式にあたる。脚部外面に多数の沈線が施される。16-5～16-8は古墳中期の土師器壺である。16-8のみ複合口縁が形骸化したもので、松山編年Ⅱ～Ⅲ期にあたる。そのほかは、同時期の単純口縁をもつものである。16-9は古墳中期の土師器高坏である。16-10～14は古墳時代の須恵器である。16-5は須恵器の無高台环で、国府編年第6型式9世纪中葉から後葉のものである。16-10は蓋坏の身で出雲5あるいは6期、16-11と16-12は蓋坏の蓋と身で出雲6期、16-13は無蓋高坏で出雲5あるいは6期にあたるものである。16-10～13は7世纪代におさまるものであろう。16-16は古代の足高高台付土師器の皿である。国府第7あるいは第8型式で、10世纪から11世纪前半のものである。16-17は中国製の青磁碗である。龍泉窯I-5類で13世纪前半のものである。16-18は中世須恵器の壺である。16-19は古瀬戸のおろし皿で、14世纪後半～15世纪にかけてのものである。⁴⁾16-20は瓷器系陶器の直線大皿で15世纪代のものと考えられる。⁵⁾16-21は瓷器系陶器の壺底部である。⁵⁾16-22～26は中世土師器の坏または皿である。すべて底部を回転糸切りしたものである。16-22は中世前半、そのほかは中世後半にあたるものと思われる。

第17図は朝鮮半島系の高台付の碗である。焼成は須恵質でかなり焼きしまっており、体部外面に2本の沈線が巡らされる。6世纪末から7世纪初頭の百濟土器と考えられる。²⁾

第18図は鉄釘である。錆による腐食のため、身がかなりやせてしまっている。

第3節 第1面(第19図)

前節(第1節2項基本層序)で述べたとおり、弥生時代中期から中世にかけての遺物包含層上面で遺構を検出しており、これを第1面と称して調査を行った。1面の検出標高は、1区5～8SPと2区8SPで約3.0mと高くなってしまい、ここから調査区東端の1区1SPでは標高約2.5m、西端にあたる2区1SPでも標高約2.5mを測る。このことから、第1面の形成層である遺物包含層が、自然堆積層の傾斜に沿って東西に向かって下がっていることがわかる。

調査区西側にあたる2区では、1SPで1面の落ち込みを一部で確認したものの、湧水が激しく崩落の恐れが発生したため、落ち込みの底面、範囲などを確認することができなかった。2区ではこれより東側すべての範囲において、1面の精査を断念している。1区では4SPと5SPにおいて、調査範囲が狭く遺構の検出が不可能であったものの、それ以外の範囲で遺構を検出することができた。

遺構は遺物を伴うものがあるものの、細片のため図示できるものが少ない。

以下、図示できる遺物を作り遺構について紹介していく、そのほかの遺構については遺構法量表(表1、2)を参照いただきたい。

また、1面と近代以降のかく乱層との間に、弥生時代から近世の遺物包含層があり、この包含層からの出土遺物を1面より上層出土遺物として掲載した。なお、この遺物包含層は近代のかく乱が激しく遺構は検出していない。

1. 1区1面7・8SP検出遺構(第20図)

SK01

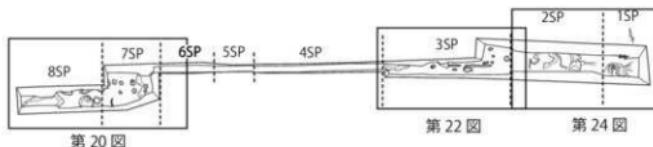
1区の最西端で検出した土坑で、南北端は調査区外に広がる。また、土坑の底面は湧水のため確認できなかった。この土坑を1面で検出したが、調査区北壁の土層観察により、1面よりも上層から掘り込まれていることがわかっている。検出面から確認できた深さは、20cm程度であるが、実際に掘り込まれた標高からは42cmを測る。この土坑からの出土遺物は、弥生時代から近世までのものであったが、ほとんどが細片である。

SK05

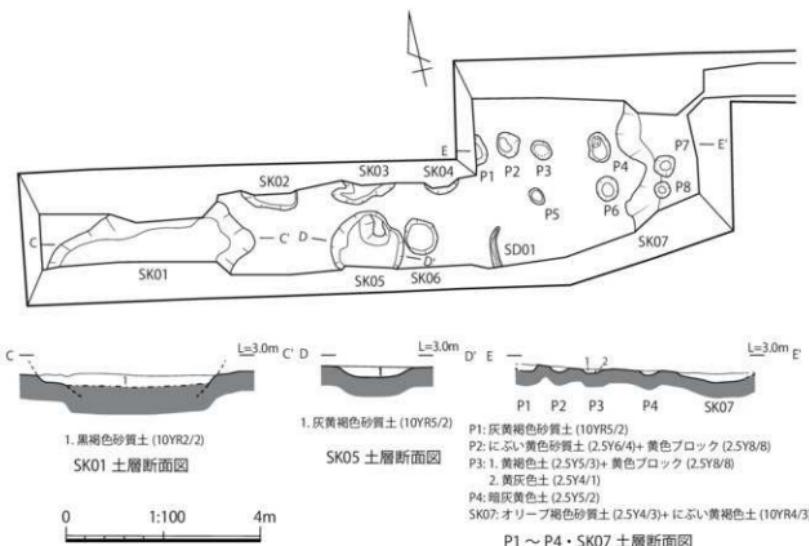
円形の土坑で、南端は調査区外に広がる。出土遺物は弥生時代から近代のものまで含まれる。

P1～P4・SK07

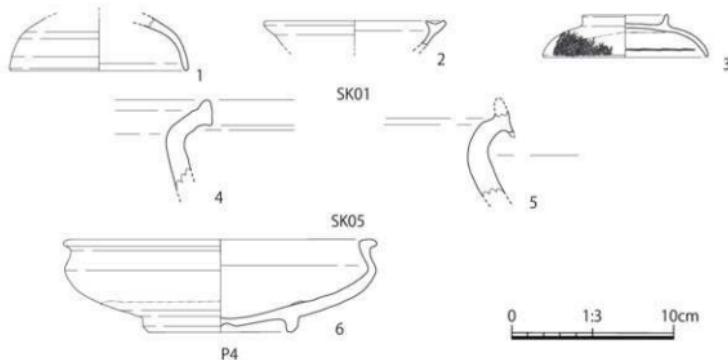
P1～P4は東西に並ぶピットであるが、それぞれの間隔はまちまちで遺構に伴う遺物も弥生時代から近代のものまでと、年代に幅がある。土坑の埋土もそれぞれ異なる土質であることからも、同時期の遺構の可能性は低い。検出面からの深さも浅く、遺構の上面が削平を受けたと思われる。SK07



第19図 1区1面遺構配置図(S=1/500)



第20図 1区 1面 7・8SP 遺構平面・断面図



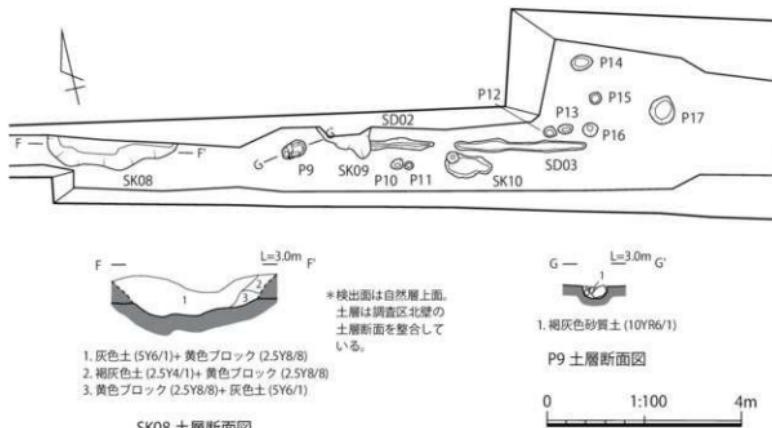
第21図 1区 1面 7・8SP 遺構出土遺物

は東にむかって落ち込む土坑であるが、西端にあたる土坑の立ち上がりは確認できなかった。

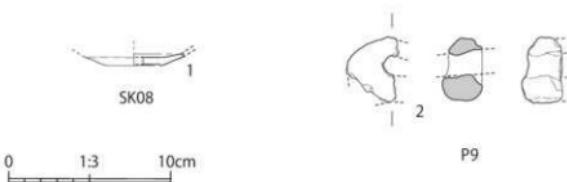
2. 1区 1面 7・8SP 遺構出土遺物 (第21図)

SK01 出土遺物 21-1は須恵器蓋の蓋、21-2は須恵器蓋の身である。いずれも出雲5～6期の7世紀代にあたるものである。21-3は肥前磁器の広東碗蓋である。九陶V期で19世紀代のものである。

SK05 出土遺物



第22図 1区1面3・4SP 遺構平面・断面図



第23図 1区1面3・4SP 遺構出土遺物

21-4と5は瓷器系陶器の甕で、いずれも5型式13世紀前半のものと思われる。¹⁾

P4 出土遺物

21-6は在地系陶器の布志名焼である。布志名焼の編年は確立されていないが、近世末あるいは近代にかかるものではないかと思われる。

3. 1区1面3・4SP 検出遺構(第22図)

SK08

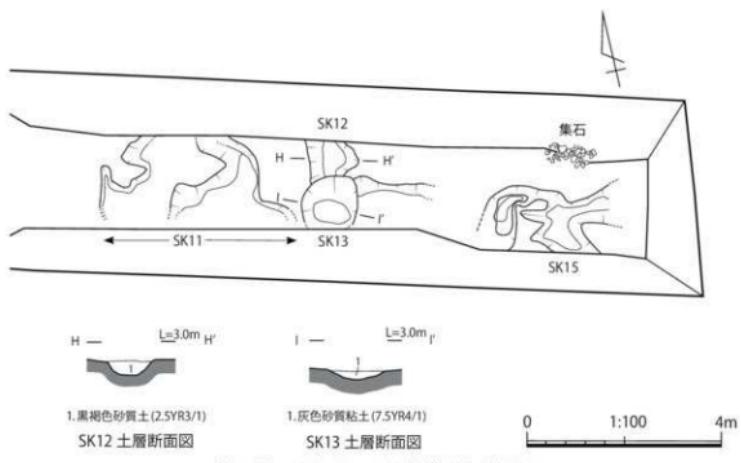
東西に長軸を持つ土坑で、北半分は調査区外に広がる。調査区北壁の土層観察から1面に伴う遺構と判断した。この土坑からは中世の遺物が出土している。

P9

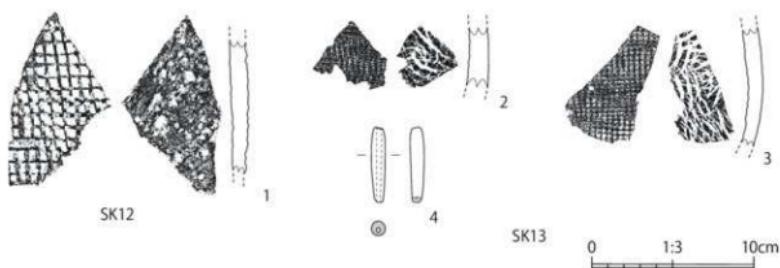
ピットのなかに拳大またはそれよりやや大きめの石を配する遺構で、ピットからは小形の鞆羽口が出土している。鍛冶に関係する遺構の可能性が考えられる。

4. 1区1面3・4SP 遺構出土遺物(第23図)

SK08 出土遺物



第24図 1区1面1・2SP 遺構平面・断面図



第25図 1区1面1・2SP 遺構出土遺物

23-1は中国製白磁皿のIV類にあたる11世紀末から12世紀後葉のものである。

P9出土遺物

23-2は輪羽口でやや小形のものである。

5. 1区1面1・2SP 検出遺構(第24図)

SK12

南北に長軸を持つ土坑で、南端はSK13に切られており、北端は調査区外に広がる。遺構の形状から溝である可能性もある。遺構からは中世須恵器が出土している。

SK13

SK12を切る形で存在する楕円形の土坑である。遺構からは弥生時代から中世の遺物が出土している。

このほか5~10cm程度の石が集積された遺構を検出しているが、遺物を伴わず、調査区の一部

表1 1区1面7・8SP 遺構法量表

遺構名	上面長軸	上面短軸	深さ	出土遺物の時期	備考
SK01	430cm	150cm	42cm以上	弥生～近世	溝水のみ、下限不明
SK02	114cm	25cm以上	26.2cm	中世	
SK03	130cm	40cm以上	14.6cm	弥生	
SK04	71cm	27cm	22.5cm	弥生	
SK05	149cm	113cm以上	23.8cm	弥生～近世	
SK06	80cm	66cm	28.2cm	弥生～中世	
SK07	270cm以上	106cm以上	41cm	弥生～中世	
P1	64cm	25cm以上	7cm		
P2	55cm	45cm	12.4cm	弥生	
P3	45cm	36cm	10.2cm	弥生～中世	
P4	63cm	42cm	12.6cm	弥生～近世	石あり
P5	39cm	28cm	4cm		
P6	52cm	44cm	11.5cm	中世	
P7	44cm	43cm	14.5cm		
P8	33cm	32cm	16cm		
SD01	85cm	18cm	3cm		

表2 1区1面1～4SP 遺構法量表

遺構名	上面長軸	上面短軸	深さ	出土遺物の時期	備考
SK08	267cm	53cm	90cm	中世	
SK09	143cm	52cm以上	51.5cm	弥生～中世	
SK10	98cm	35cm	9.1cm	古墳	
SK11	360cm	170cm以上	29.3cm	弥生～古墳	
SK12	94cm以上	98cm	13.9cm		
SK13	108cm以上	112cm	13.9cm	弥生～中世	
SK14	146cm以上	104cm以上	19.9cm		
SK15	250cm以上	140cm以上	8.3cm		
P9	53cm	40cm	21cm		石あり
P10	27cm	21cm	14cm	古墳～中世	
P11	18cm	16cm	4.5cm		
P12	27cm	23cm	9.6cm		
P13	31cm	20cm	5.8cm		
P14	45cm	43cm	11.9cm	古墳	
P15	26cm	24cm	4.8cm	弥生	
P16	32cm	2.7cm	15.7cm		
P17	57cm	52cm	10.7cm		
SD02	134cm以上	14cm	9.2cm	弥生	
SD03	267cm	15cm	5.2cm	古墳	

分のみの検出であるため、遺構の性格は不明である。

6. 1区1面1・2SP 遺構出土遺物(第25図)

SK12 出土遺物

25-1は中世須恵器の甕である。外面の格子タタキ目がやや大きめのものである。

SK13 出土遺物

25-2と3は須恵器の甕で、古墳時代のものである。25-4は土錘である。

7. 2区1面より上層出土遺物(第26～29図)

第26図は弥生時代から中世の遺物である。26-1は弥生時代の高環の脚部である。26-2は古墳時代の須恵器甕である。26-3は土師器の环で、古代末ぐらいのものであろうか。26-4、5は土師器の高

台付の壺あるいは皿である。古代末あるいは中世初頭のものであろうか。26-6は中世須恵器の壺である。外面格子タタキが大きめのものである。26-7は古瀬戸の瓶子である。外面はオリーブ黄色の釉薬がかかり、内面には釉薬はかけず、指頭圧痕が目立つ。26-8、9は瓷器系陶器の壺である。⁵⁾ 26-9は7型式14世紀前半のものと思われる。26-10は瓷器系陶器の鉢である。Ⅲ-1期13世紀末から14世紀初頭のものと考えられる。26-11は備前焼の播鉢である。乗岡編年中世5～6期15世紀後半～16世紀末のものである。⁶⁾ 26-12～27は中世土師器の壺あるいは皿である。26-12～14は底部を回転糸切りで仕上げる中世前半の壺あるいは皿である。26-15～25は底部を回転糸切りで仕上げる中世後半の壺または皿である。26-26、27は手づくねの皿で、中世末ぐらいのものであろうか。

第27図は近世の遺物である。27-1、2は肥前磁器碗である。九陶IV期18世紀代のものである。27-3は在地系陶器碗である。緑釉の布志名焼で、19世紀代のものと考えられる。27-4は在地系陶器皿で、褐色のいわゆる来待釉がかかる布志名焼である。

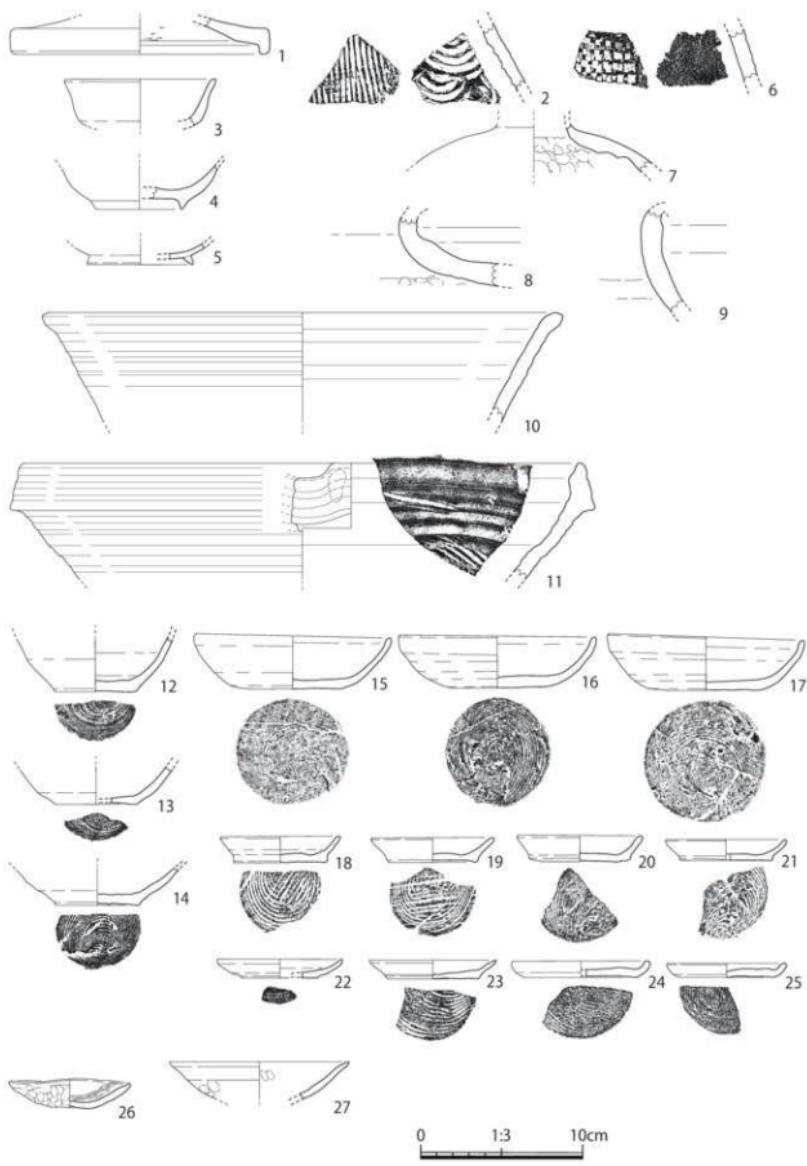
第28図はるつぼ状の金属製品である。X線撮影を行ったが、腐食のため金属成分がほぼ流れ出てしまっている。

第29図は花崗岩製の石製品で、1面のみ使用痕がみられる。調査区からは輪羽口や細片のため掲載していないが、鉄滓も数点出土していることから、砥石のほか金床石の可能性も考えられる。

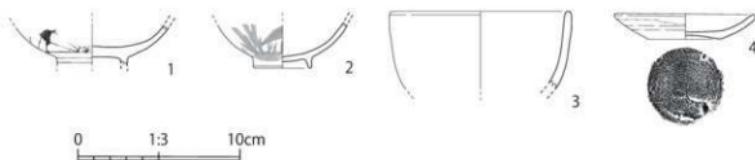
8. 1区1面より上層出土遺物(第30～31図)

第30図は弥生中期から近世の遺物である。30-1は弥生中期後葉の広口壺で、松本IV様式にあたる。口縁部外面に5条の凹線を施し、外面頸部に縱方向のハケ目を施す。また、口縁部内面にも凹線が施されており、頸部内面は横方向のハケ目で仕上げられている。30-2は弥生中期の高壺で、外面に4条の沈線が施される。内面は粘土のしづり目が残る。30-3は古墳中期の土師器壺である。口縁部欠損のため、複合口縁か単純口縁なのかは不明である。30-4は古墳時代土師器の高壺である。外面調整はナデで、内面は粘土のしづり目が残る。30-5は古墳時代土製支脚の一部と思われる。30-6、7は古墳時代須恵器の蓋壺である。いずれも出雲6期7世紀代のものと思われる。30-8、9は古墳時代須恵器の壺である。30-10、11は土師器の足高高台付壺である。国府編年第7～8型式で10世紀～11世紀前半にあたるものである。30-12は須恵器の蓋壺の蓋で、国府編年第5型式8世紀末葉～9世紀前葉のものと思われる。30-13は須恵器蓋壺の壺で、国府編年第1型式7世紀後葉のものである。30-14は瓦質土器の火鉢で、外面頸部に菊花文のスタンプが施される。内面頸部から下部は横方向のハケ目が施される。中世後半でも16世紀までのものと思われる。30-15、16は中世土師器の壺あるいは皿である。30-15は底部径が小さいため、壺と思われる。壺であれば、14世紀から15世紀にかけてのものではないだろうか。30-16は16-24の皿に類似しており、16世紀代ぐらいのものであろうか。30-17は在地系陶器の碗である。緑釉の布志名焼で19世紀代のものと思われる。30-18は肥前磁器の碗で、九陶IV期にあたる18世紀代のものである。30-19は肥前磁器の廣東碗で、九陶V期にあたる19世紀代のものである。

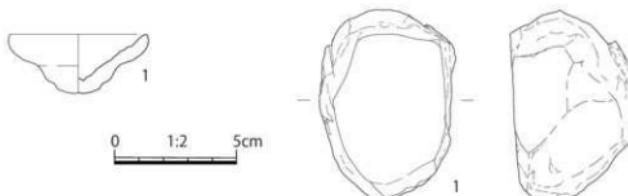
第31図は近世の古銭である。31-5は腐食のため文字が消えてしまっているが、このほかはすべて寛永通宝である。これらはまとめて出土しているため、31-5も寛永通宝と考えられる。31-1～3



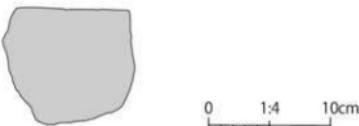
第26図 2区1面より上層 出土遺物



第27図 2区1面より上層出土遺物



第28図 2区1面より上層出土 金属製品



第29図 2区1面より上層出土 石製品

はス貝宝で古寛永、31-4は裏に「文」の字があるため、寛文8(1668)年以降に鋳造された新寛永のなかでも寛文12(1672)年までの限られた時期に鋳造されたものである。

註 1) 中野晴久 2011 「常滑系陶器編年」『第10回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における越前・常滑系陶器』

註 2) 平部達哉氏(島根大学)の御協力により、寺井誠氏(大阪歴史博物館)に鑑定していただいた。

註 3) 弘生中期の広島県北部の三次市塙町遺跡から出土した装飾性の強い土器で、沈線文の間に刻目を施す文様を獣、鉢などとの胸部上半に施すものを塙町式とすると伊藤実氏(広島県立歴史民俗資料館)によって定義づけられている。しかし、山陰地域で出土するものに、塙町式土器の特徴を有しつつ、胎土は在地のものと変わらないものもあり、必ずしも塙町式土器そのものが搬入されたわけではなく、塙町式土器の影響を受けて在地で作成されたものも含まれる可能性があるため、「塙町式系」と称している。

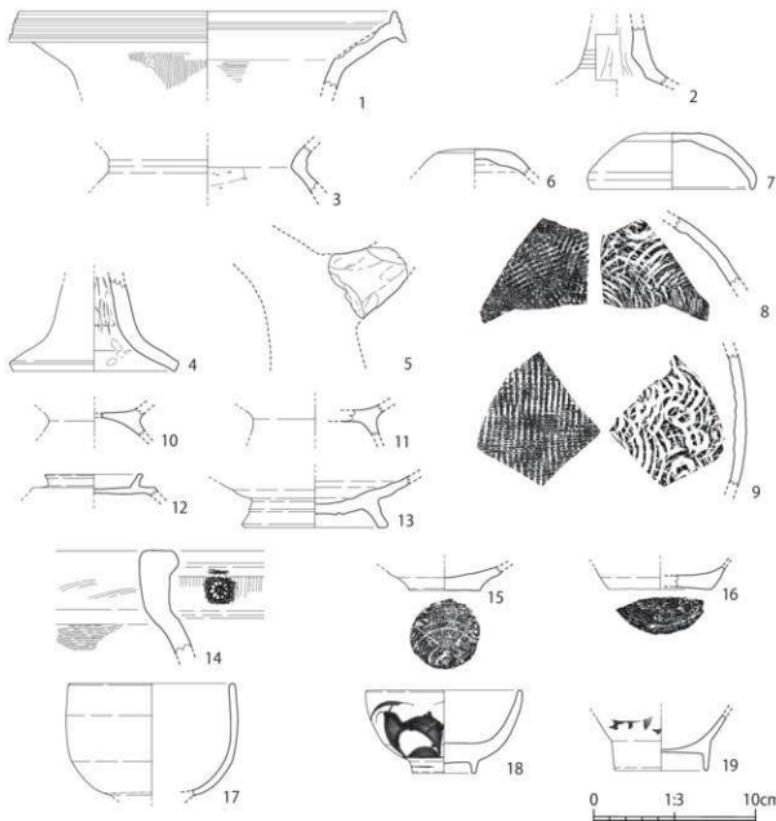
米田美江子 2002 「第3章 第3節 捆入系遺物」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 下古志遺跡・考察編』出雲市教育委員会増田浩太 2003 「第3章 第5節 まとめ 塙町式土器について』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 家の後I 遺跡 塙ノ内遺跡』国土交通省中国整備局 島根県教育委員会

註 4) 古瀬戸は以下の文献を参考にした。

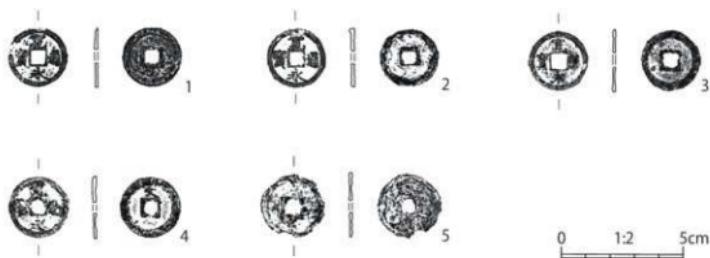
藤沢良祐 2007 「古瀬戸製品編年表」『愛知県史 別編 窯業2』愛知県史編さん委員会

註 5) 木村孝一郎 2011 「越前焼の編年の研究と生産地の動向」『第10回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における越前・常滑系陶器』

註 6) 乘岡実 2008 「備前焼の編年について」『第7回山陰中世土器検討会 山陰地方における備前焼』



第30図 1区1面より上層出土遺物



第31図 1区1面より上層出土 古銭

第4章 総括

今回の調査では、遺構の存在は顕著ではないものの、弥生中期土器をはじめ多くの遺物が出土した。また、各調査区、各SP(スパン)で自然堆積層の科学分析を行うことで、地形の変化を明らかにすることができた。以下では、この地形の変化と遺物の出土状況の関係を探ってみたい。さらに朝鮮半島系土器や塩町式系といった他地域の土器の流入について考察し総括したい。

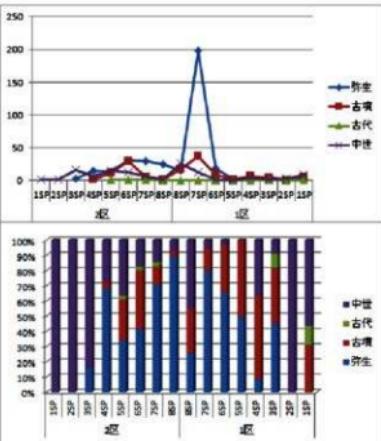
第1節 遺物の出土地点と砂州の発達過程

調査スパン毎の遺物包含層の遺物の出土状況を、グラフに表した（第32図＊掲載・非掲載のものを含めた数量）。このグラフから、弥生時代の遺物が調査区中央部で多く（最多は1区7SP）、両端で少ない傾向にある事が分かる。古墳時代の遺物は調査区中央部の1区8SPと2区5SPでピークを成し、特に2区西部で少ない傾向にある。古代の遺物は他時期に比べ特に少ない。中世の遺物は古墳時代の遺物と同様な傾向を示すが、2区西部でも検出される。これらの事柄を前述の砂丘の発達過程、及び山陰地域での海岸砂丘の発達時期（豊島、1975）と重ねると、以下の事柄が明らかになる。

1. 弥生時代から古墳時代にかけては海水準が低く、宍道湖の水位も低かったと考えられる。このため砂州上面は乾燥し、人間活動が活発であった。
2. 古代には海水準が上昇し（平安海進）、宍道湖の水位も上昇したと考えられる。出土遺物も古代のものが極めて少量で、砂州の広範囲が沈水し、生活に適さなくなっていた。
3. 中世では古代に比べ海水準が低下し、宍道湖の水位も低下したと考えられる。水位低下に伴い第3図の砂州3相当の部分が広がり、新たにできた陸域に生活の場が広がった。

第2節 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器

今回調査した森屋敷遺跡では、山陰地方の弥生中期土器に伴って、同時期の広島県北部を起源とする沈線文間に刻目を施す塩町式系の土器¹⁾(33-1)が出土した。また、時代が異なるものの原三国後半期もしくは三国時代初頭（弥生後期～古墳前期初頭頃）の朝鮮半島系の壺(33-2)、百濟の6世紀末～7世紀初頭の朝鮮半島系高台付の碗(33-3)も出土している。



第32図 調査スパン毎の遺物の出土状況

上：実数 下：累積百分率
両グラフとも調査スパンを西（左）から東（右）に記述

出雲地方において、遺跡内で山陰地方の土器とともに塩町式系土器、朝鮮半島系土器が出土した遺跡に限り示すと第34図のような分布を表わす。

②山持遺跡(出雲市)は斐伊川、神戸川によって形成された沖積平野の北辺に位置する縄文～近世の集落遺跡である。35-1は甕の頸部から胴部にかけて沈線文間に刻目を施す塩町式系土器である。35-2、3は朝鮮半島系土器で、35-2は弥生中期後葉～後期中葉の樂浪土器である。35-3は両耳付短頸甕で弥生後期でも草田5期併行とされている。森屋敷遺跡33-2と同様のものと思われる。山持遺跡では、このほか北部九州系、西部瀬戸内沿岸部系、吉備系といったさまざまな地域からの土器が多く出土している。

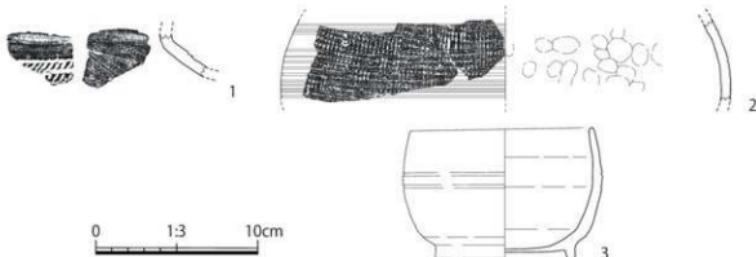
③青木遺跡⁴⁾(出雲市)も斐伊川、神戸川によって形成された沖積平野の北辺に位置する弥生～鎌倉時代の墳墓、官衙関連、祭祀遺跡である。35-4は塩町式系の甕である。35-5は陶質の朝鮮系土器で甕の一部と推定されている。このほか九州から瀬戸内地方にかけての搬入土器も出土している。これらの土器は包含層からの出土であり、周辺の集落から廃棄されたものと推定されている。

④古志本郷遺跡(出雲市)は神戸川左岸の自然堤防上及び後背湿地に位置する弥生～近世の集落遺跡である。35-6は塩町式系の甕である。35-7、8は朝鮮半島系土器の両耳付短頸甕で、森屋敷遺跡33-2と同様のものと思われる。また、北部九州系、畿内系の土器、さらに朝鮮半島由来の韓式三稜鏡も出土している。

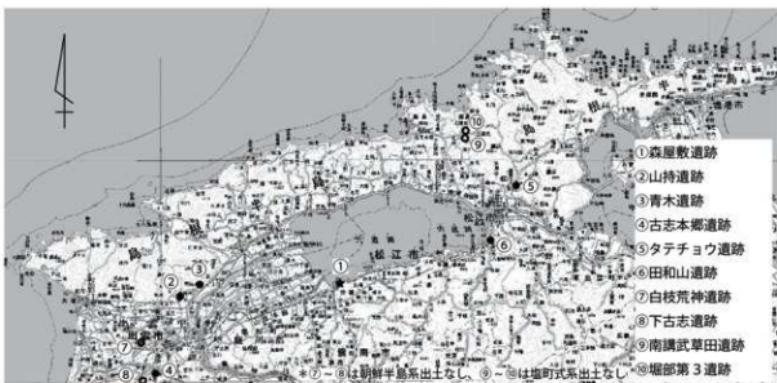
このほか出雲平野では⑦白枝荒神遺跡や⑧下古志遺跡⁷⁾などで、朝鮮半島系土器は見られないものの塩町式系あるいは北部九州系や西瀬戸内沿岸部系の搬入土器が出土している。

⑤タテチョウ遺跡⁸⁾(松江市)は松江市北東方向から大橋川に流れる朝酌川沿いにある弥生時代を中心とする縄文～中世の集落遺跡である。35-9は報告書では明記されていないものの沈線文間に刻目を持つ塩町式系の高环の环部分と考えられる。35-10は朝鮮半島系土器で、森屋敷遺跡33-2と同様の甕と思われる。上記の出雲市内の遺跡ほどの出土量ではないが、畿内系の土器の存在も報告されている。また、報告書で言及はされていないが、35-11は西部瀬戸内系の甕と思われる。

⑥田和山遺跡⁹⁾(松江市)は穴道湖東岸の乃木段丘の一角を占める独立丘陵上に存在する弥生～平安時代にかけての集落遺跡である。35-12は報告書で明記されていないが、塩町式系の高环と考えられ



第33図 森屋敷遺跡出土の塩町式系土器と朝鮮半島系土器



第34図 塩町式系土器と朝鮮半島系土器出土遺跡の分布図 (S=1/50,000)

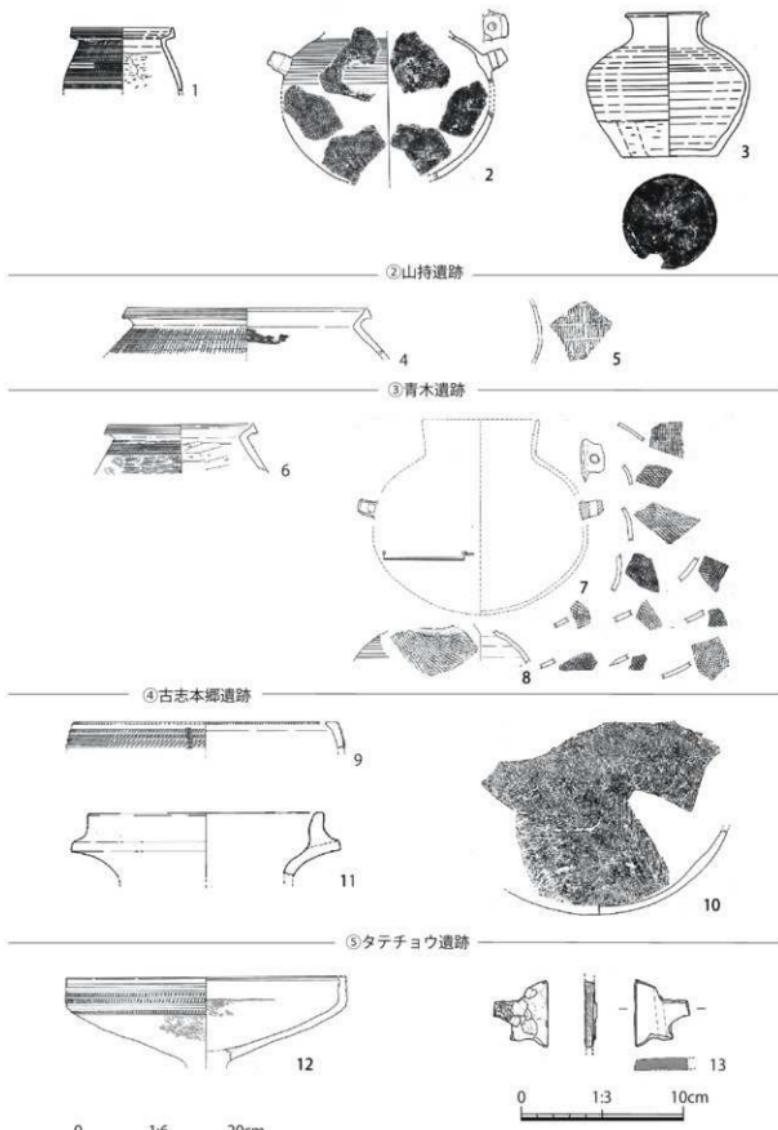
る。田和山遺跡では朝鮮半島系土器は出土していないものの、環濠内から出土した板状石製品35-13が楽浪の硯であることがわかっている。¹⁰⁾このように田和山遺跡でも少量ながら、他地域の土器が出土している。

このほか松江市内では、塩町式系土器は出土しないものの他の地域との交流が覗える遺跡は、日本海沿岸に近い松江市鹿島町の⑨南講武草田遺跡、¹¹⁾⑩堀部第3遺跡ぐらいであろうか。しかし、これらの遺跡については、地理的に宍道湖を介してではなく、日本海沿岸部から流入した可能性が高い。

このように見ていくと、現在確認できるところでは、日本海側から搬入されたと考えられる朝鮮半島系土器が出土する遺跡の南限は④古志本郷遺跡で、広島県北部からもたらされたと考えられる塩町式系土器が出土する遺跡の北限は⑤タテチョウ遺跡である。このことから、塩町式系土器と朝鮮半島系土器の両方を有する①から⑥の遺跡は、日本海側からと中国山地側からの文化が合流する交通の要衝として発達した遺跡と言えるのではないだろうか。ゆえに、これらの遺跡が弥生時代、遺跡によっては縄文時代から中世あるいは近世に至るまで継続して利用されてきた事実は十分理解できる。

第3節 まとめ

今回調査をした森屋敷遺跡では、遺構の検出が困難であったが、弥生中期から近世にかけての遺物が出土し、そのなかでも弥生中期、中世の遺物が多く出土した。今回は明らかな中世の遺構は検出できていないものの、平成26年度に実施した穴道複合施設建設に伴う森屋敷遺跡の調査では、中世の遺物とともに屋敷の一部と考えられる掘立柱建物跡が検出されており、¹²⁾今回の調査地で多くの中世遺物が出土したことから、屋敷の存在を追認するデータが得られた。また、これまで森屋敷遺跡周辺で、弥生中期土器がこれほど多量に出土したのは、今回の森屋敷遺跡が初めてのことである。弥生中期土器には広島県北部から流入してきた塩町式系土器も含まれ、これより時期が下るもの朝鮮半島系土器が2点出土したことも弥生時代から古墳時代にかけて他地域との交流が伺える大きな成果を得た。



第35図 そのほかの遺跡出土の塩町系土器と朝鮮半島系土器（一部別のものも含む）

また、自然科学分析と遺物の組成の変化を捉まえる(第4章第1節)ことにより、中世以降、調査区2区から西側へ砂層が広がり穴道湖の南岸が北上していったことが明らかにできた。近世の宿場町はこの上に形成されたものである。

以上のように、森屋敷遺跡が古くから交通の要衝であったことが判明した。今後も周辺地域での類似資料の増加を期待したい。

- 註 1) 塩町式土器の特徴を有しつつ、胎土は在地のものと変わらないものもあり、必ずしも塩町式土器そのものが搬入されたわけではなく、塩町式土器の影響を受けて在地で作成されたものも含まれる可能性があるため、「塩町式系」と称している。
増田浩太 2003「第3章 第5節 まとめ 塩町式土器について」『・尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ -家の後ノ遺跡／内遺跡』国土交通省中国整備局 島根県教育委員会
- 註 2) 東山信治 2012「第6章 第3節 山持遺跡の非在地系土器について」『山持遺跡 Vol.8(6.7区) 国道431号道路(東林木バイパス)改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10』島根県教育委員会
- 註 3) 米田美江子 1997「第3章 7.一考察 西瀬戸内系複合口縁壺」『市道松崎下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -白枝荒神遺跡』出雲市教育委員会
- 註 4) 今岡一三・松尾充昌 2006「第1章 第1節 弥生・古墳時代の青木遺跡」『青木遺跡Ⅱ 国道431号道路(東林木バイパス)改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』島根県教育委員会
- 註 5) 守則利実「第6章 3節 三韓系土器について」「第7章 まとめ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X VIII 古志本郷遺跡VI-K区の調査』- 國土交通省中国地方整備局出雲工事事務所 島根県教育委員会
- 註 6) 註 3) に同じ
- 註 7) 米田美江子 2002「第3章 第3節 梱入系遺物」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 下古志遺跡- 考察編-』出雲市教育委員会
- 註 8) 柳浦俊一 1990「IV 第4-6層出土遺物の考古学的観察」『朝酌川河川改修工事に伴う タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』島根県土木部河川課 島根県教育委員会
- 註 9) 松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2005『松江市文化財調査報告書第99集 田和山遺跡群発掘調査報告書1 田和山遺跡』
- 註 10) 岡崎雄二郎 2005『環濠内出土板状石製品について』松江市文化財調査報告書第99集 田和山遺跡群発掘調査報告書1 田和山遺跡』
- 註 11) 鹿島町教育委員会 1992『講武地区祭喰園圃整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』
- 註 12) 赤澤秀則 2000「墓と海と-島根の弥生文化の一侧面-」『神々の源流-出雲・石見・隱岐の弥生文化-』大阪府立弥生文化博物館
- 註 13) 松江市教育委員会 公益財團法人松江市スポーツ振興財团 2015『松江市文化財調査報告書第162集 穴道複合施設整備事業に伴う発掘調査報告書 森屋敷遺跡』

参考文献

1. について

豊島吉則 1975「山陰の海岸砂丘」『第四紀研究』14(4), 221-230.

2. について

亀田修一 2001「出雲・石見・隱岐の朝鮮系土器・古墳時代資料を中心に-」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X II 蟹谷遺跡 上沢Ⅲ遺跡 古志本郷遺跡Ⅲ』国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
寺井誠 2009「紀元前後から7世紀までの朝鮮半島系土器について」島根県埋文センター専門研修資料

表3 遺物觀察表

試験済み出力物		測定値(%)	測定方法	色相	地主	種類	備考
品目	規格	基準	日本規格	測定法	基準	日本規格	
6-1 人眼部 色度	(JIS Z 8730)	-0.34	内ナダ、H45-50(カバーフィルタ、ヘキサゴン)	内反射光輝相 10%R ₄	Unimat(角の反光、長方形) 鏡光反射	10%R ₄ -鏡光反射	山形小判
6-2 色調 正味率	-	(±1.1)	内ナダ	表面反射光輝相	鏡	10%	大島小判
6-3 人眼部 色味	(JIS Z 8730)(カバーフィルタ、封筒状)	(±0.8)(±1.7)	内ナダ	外反射光輝相 2.5YRS-6	Unimat(以下の表面を多層鏡) 鏡	表面反射光輝相 10%	吉田小判
6-4 調色部 色味	(JIS Z 8730)(内封筒用ナダ)	-	内ナダ、ナダ	内反射光輝相	鏡	10%	山形小判
6-5 人眼部 色味	(JIS Z 8730)	-0.14	内ナダ、ナダ	内反射光輝相	鏡	10%R ₄ -鏡光反射	山形小判

第10章

项目	指标	单位	值	备注
6.6 百货类	店铺	家数	100.2	7.3%

236 植物生态学与植物

遺物觀察表

11-10	胸鰓	黒	(0.00)	-	0.31	内肉細ナメ	内肉細胞色 5370R-3	黒、1mm以下の中筋性毛	1.0mm以下	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-11	胸鰓	黒	(0.04)	-	4.00	内肉ナメ	内肉細胞色 2.5370R-4 2.5370R-5	0.3mm以下の下筋性長毛	0.3mm以下	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-12	胸鰓	赤	(0.00)	-	4.35	内肉細ナメ	内肉オーラル色 1012R-2	赤	1.0mm以下	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-13	下顎鰓	黒	(0.10)	1.0	1.00	内肉細ナメ	内肉浅黒色 1010R-3	0.3mmの筋性毛の下筋性長毛	1/4	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-14	下顎鰓	黒	(0.09)	1.00	1.2	内ナメ、頭部細ナメ	内肉浅黒色 7.0370R-4	0.3mm以下の中筋性毛	1/4	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-15	下顎鰓	黒	(0.05)	0.42	1.4	内ナメ、頭部細ナメ	内肉浅黒色 7.0370R-3	0.3mm以下の中筋性毛	1/4	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-16	下顎鰓	黒	(0.10)	0.00	0.00	内感ナメ、頭部細ナメ	内肉浅黒色 7.0370R-3	0.3mm以下の中筋性毛	1/4	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-17	下顎鰓	黒	(0.11)	0.57	2.0	内ナメ、頭部細ナメ	内肉浅黒色 7.0370R-4	0.3mm以下の中筋性毛	1/5	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-18	下顎鰓	黒	(0.04)	0.00	1.2	内肉細ナメ	内肉白 2.5370R-3	1mm以下の中筋性毛	1/4	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-19	下顎鰓	黒	(0.03)	5.4	1.15	内肉細ナメ	内肉白 2.5370R-3 内肉白 2.5370R-2	1mm以下の中筋性毛	1/5	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-20	下顎鰓	黒	(0.10)	0.00	1.00	内肉細ナメ	内肉浅黒色 7.0370R-4	0.3mm以下の中筋性毛	1/5	黒濃度 2~6倍式(4代)
11-21	下顎鰓	黒	(0.20)	0.20	1.4	内ナメ	内肉浅黒色 1010R-4	0.3mm以下の中筋性毛	1/5	黒濃度 2~6倍式(4代)
12-1	網膜	赤	-	-	0.00	赤子網膜の後輪輪毛	赤子網膜の後輪輪毛	0.3mm以下の中筋性毛	1.0mm以下	赤子網膜→赤脚前脚の網膜

刀匯 遊物志

项目	指标	数据	质量(M)			重量(g)	备注
			最大值	最小值	平均值		
1.1	金创酒店	资金归还	0.5	2.4	1.1	28.35	
1.2	金创酒店	退款	0.15	1.5	1.1	16.50	
1.3	金创酒店	退款	0.00	1.2	1.15	18.80	

植物包含標出土植物

12. 1箇以上上場生地・企画商品			以下の扱い方		(a)未・(b)		
種類	回数	期間	最大額	最大額	度数	量(g)	備考
18.1 企画商品、販路	6.5	1.55	1.8	17.72			

10. 道路に係る特種車両 土砂販送		運送方法	運送区域	積載量(t)	積載高(m)	積載幅(m)	積載長(m)	運送料(円)	備考
登録番号	登録品目								
23-2	P9 土砂販送	III-1	(4)B	0.25	2.0	2.0	10.0	99,400円(税込)	99,400円(税込)

遺物観察表

番号	種類	度	-	(3)	名前	測定値	備考			
26-0	陶器	度	-	(3)	内側面 内ナガ	内側面下 1.50±0.5	直角系 1.50±0.5 直角系(14cm前後)			
26-10	陶器	度	(11.2)	(6.6)	内側面ナガ	内側面下 7.50±0.5	1mm以下(下)の石質・岩石セメント 量充て			
26-11	陶器	度	(14.2)	-	内側面ナガ	内側面下 5.00±0.4	直角系 第1例(1200~1300年)			
26-12	土器部	度	-	(14.0)	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 7.00±0.4	直角系 少子・4歳(15cm前後~16cm) 八時編			
26-13	土器部	度	-	(14.0)	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 10.00±0.3	直角系 少子(15cm前後~16cm) 八時編			
26-14	土器部	度	-	(14.1)	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 2.50±0.3	0.5mm以下(下)の石質・岩石 量充て 直・量充て			
26-15	土器部	度	12.0	0.6	3.4	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.3	1mm以下(下)の石質・岩石セメント 量充て 直充て		
26-16	土器部	度	12.0	0.2	3.2	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.3	1mm以下(下)の石質・岩石セメント 量充て 直充て		
26-17	土器部	度	11.0	7.0	3.5	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.3	1mm以下(下)の石質・岩石セメント 量充て 少子充て		
26-18	土器部	度	27.1	0.0	1.6	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 3.00±0.6	直充て 直充て 直充て		
26-19	土器部	度	27.0	5.0	1.5	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 3.00±0.6	直・余裕の石質セメント充て		
26-20	土器部	度	17.0	46.2	1.6	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 5.00±0.6	0.5mm以下(下)の石質・岩石セメント 量充て		
26-21	土器部	度	17.0	45.0	1.5	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 5.00±0.6	直充て 直充て 直充て		
26-22	土器部	度	17.0	(44.0)	1.5	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.4	0.5mm以下(下)の石質・岩石 量充て 直充て		
26-23	土器部	度	17.0	(34.0)	1.1	内側面ナガ 内側面ナガ 内ナガ	内側面下 0.50±0.6	0.5mm以下(下)の石質・岩石 量充て 直充て		
26-24	土器部	度	19.0	8.0	1.0	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.6	1mm以下(下)、1mm以下(上) 直充て		
26-25	土器部	度	17.0	4.0	0.9	内側面ナガ 内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.4	1mm以下(下)の石質・岩石・量 充て 直充て		
26-26	土器部	度	7.4	3.2	1.0	内側面ナガ 内側面ナガ 内ナガ	内側面下 1.00±0.3	1mm以下(下)の石質・岩石 量充て 直充て		
26-27	土器部	度	(11.1)	-	(2.0)	内側面ナガ 内ナガ	内側面下 1.00±0.2	0.5mm以下(下)の石質・岩石 量充て 直充て		
27-1	漆器	度	-	(2.0)	内側面ナガ	漆器(内)のNRI	直角系 直角系			
27-2	漆器	度	-	(3.0)	内側面ナガ	漆器(外)のNRI	直角系 直角系			
27-3	陶器	度	(10.0)	-	(4.0)	内側面	内側面下 1.00±0.3	1mm以下(下)の石質・岩石 直充て		
27-4	陶器	度	8.2	4.5	2.0	内側面 内側面	内側面下 1.00±0.3	0.5mm以下(下)の石質・岩石充 て 直充て		
28	1面より上層出土 金属品									
番号	種類	度	C面	B面	測定	重量(g)	備考			
28-1			5.6	1.8	2.4	13.83				
29	1面より上層出土 石器品									
番号	種類	度	最大長	最大幅	測定	重量(g)	備考			
29-1	石器品 金剛山の	(15.0)			10.0	12.200				
30	1面より上層出土									
番号	種類	度	最大長	最大幅	測定-手法の特徴	色調	地土	層序	備考	
30-1	骨生土器 底の底	(23.0)	-	内ナガ	内ナガ、扇形のハサミ、多孔の切削 内ナガ、扇形のハサミ、多孔の切削	内側面下 1.00±0.4	1mm以下(下)の石質・岩石・量 充て 内側面下 1.00±0.3	1mm以下(下)の石質・岩石 直充て 内側面下 1.00±0.3	1mm以下(下)の石質・岩石 直充て 内側面下 1.00±0.3	直角系 直角系(14cm前後)
30-2	骨生土器 底盤	-	-	内ナガ	内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.4	直充て 内側面下 1.00±0.3	直充て 内側面下 1.00±0.3	直充て 内側面下 1.00±0.3	直角系 直角系
30-3	土器部 底	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 1.00±0.4	直充て 内側面下 1.00±0.3	直充て 内側面下 1.00±0.3	直充て 内側面下 1.00±0.3	直角系 直角系
30-4	土器部 底盤	-	(10.0)	内ナガ	内ナガ、鋸刃	内側面下 1.00±0.4	内側面下 1.00±0.3	内側面下 1.00±0.3	内側面下 1.00±0.3	直角系 直角系
30-5	土器部 扇蓋	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 1.00±0.6	直充て 内側面下 1.00±0.3	直充て 内側面下 1.00±0.3	直充て 内側面下 1.00±0.3	直角系 直角系
30-6	土器部 製作	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面ナガ 内側面ナガ	内側面下 1.00±0.4	内側面下 1.00±0.3	直充て 直充て	直角系 直角系
30-7	土器部 底	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 2.50±1	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/4 直充て	直角系 直角系
30-8	土器部 底	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 2.50±1	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/4 直充て	直角系 直角系
30-9	土器部 底	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 2.50±1	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/4 直充て	直角系 直角系
30-10	土器部 底盤	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 2.50±1	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/4 直充て	直角系 直角系
30-11	土器部 底盤	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 2.50±1	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/4 直充て	直角系 直角系
30-12	土器部 底	-	15.0	14.0	内側面ナガ	内側面下 1.00±0.6	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/3 (内・外)直充て	直角系 直角系
30-13	土器部 底	-	14.0	12.0	内側面ナガ	内側面下 1.00±0.6	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/2 直充て	直角系(14cm前後)
30-14	瓦質土器 滲出	-	-	内ナガ	内ナガのハサミ、スランプ 内ナガ、鋸刃のハサミ	内側面下 1.00±0.3	1~5mm以下の石質 0.5~2mm以下の石質・岩石	1~5mm以下の石質 0.5~2mm以下の石質・岩石	1/4 直充て	直角系 直角系
30-15	土器部 扇蓋	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 1.00±0.6	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/2 直充て	直角系 直角系
30-16	土器部 扇蓋	-	-	内ナガ	内ナガ	内側面下 1.00±0.6	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/2 直充て	直角系 直角系
30-17	陶器 底	(10.0)	-	内側面	内側面ナガ	内側面下 1.00±0.6	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	0.5mm以下(下)の石質・岩石 直充て	1/3 直充て	直角系 直角系
30-18	瓦質土器 正規形	度	9.6	3.9	5.1	瓦質土器	瓦質土器 NRI	直充て	4/5 直充て	直角系 直角系
30-19	瓦質土器 正規形	-	-	0.40	0.40	内側面	瓦質土器 NRI	直充て	直充て	直角系 直角系
30-20	1面より上層出土 古鏡									
番号	種類	表面(cm)	裏面(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)		備考			
30-1	古鏡	24.6	5.63	1.00	3.40	八戸型				
30-2	古鏡	24.5	5.10	2.01	3.36	八戸型				
30-3	古鏡	25.0	6.05	1.51	3.56	八戸型				
30-4	古鏡	25.31	5.39	1.01	3.47	圓に「元」				
30-5	古鏡	25.76	5.50	2.45	1.81					

写 真 図 版



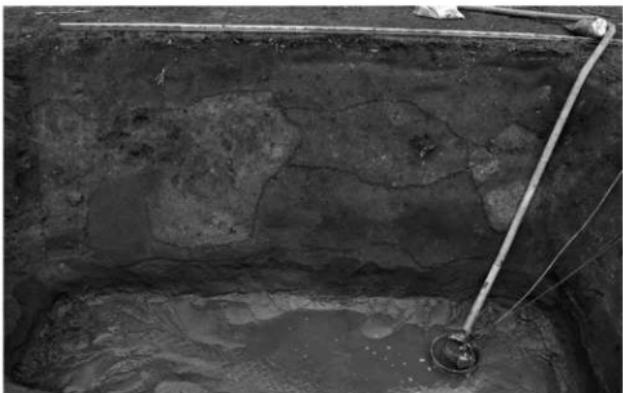
調査開始前状況(1区東端から)



調査終了状況(2区西端から)



2区 4SP 土層堆積状況
(北壁)



2区 7SP 土層堆積状況
(北壁)



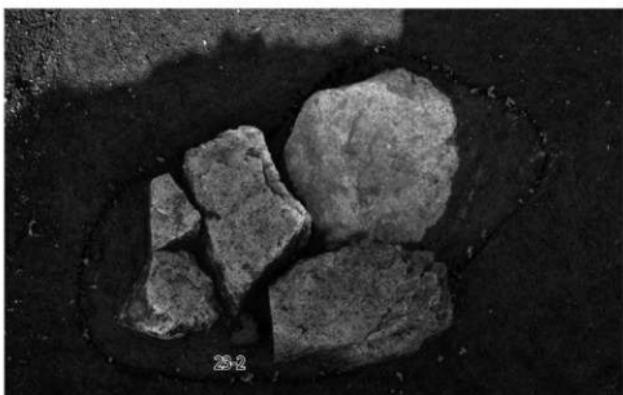
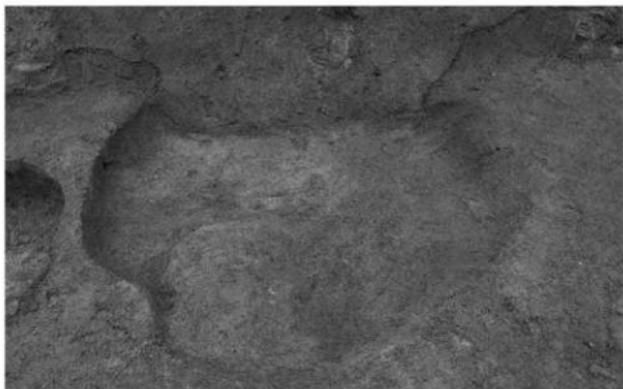
1区 8SP 土層堆積状況
(北壁)



2区 1SP 検出状況(南西から)



1区 SSP 検出状況(南東から)

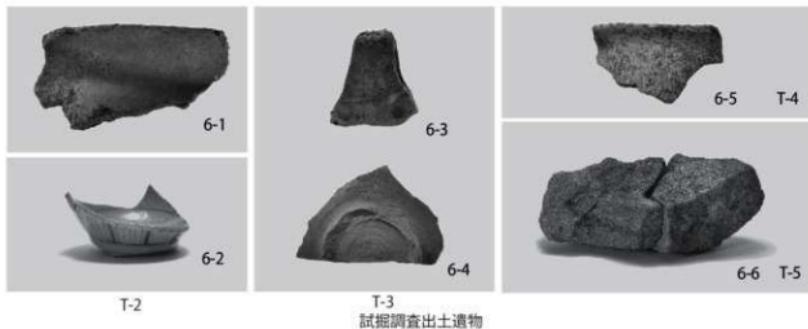




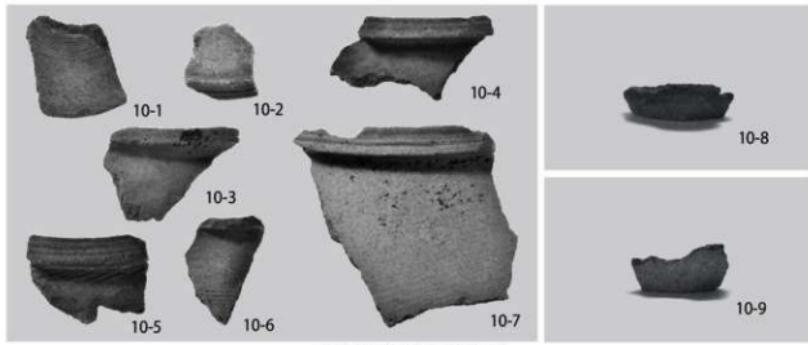
1区 7SP1面 完掘状況(南から)



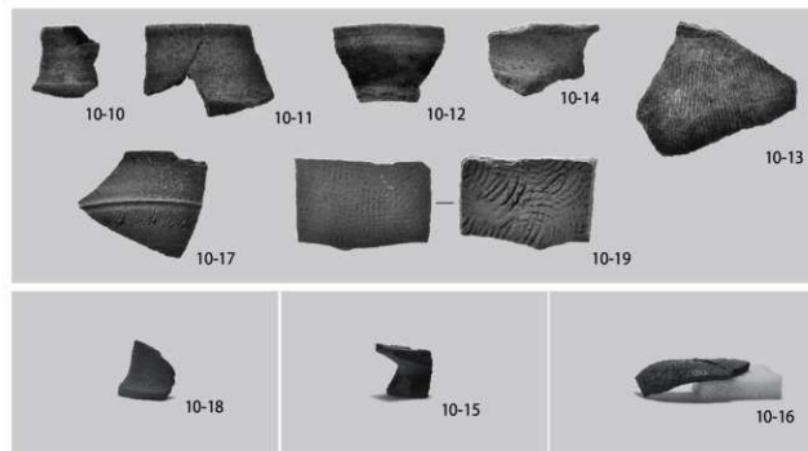
1区 3SP1面 完掘状況(東から)



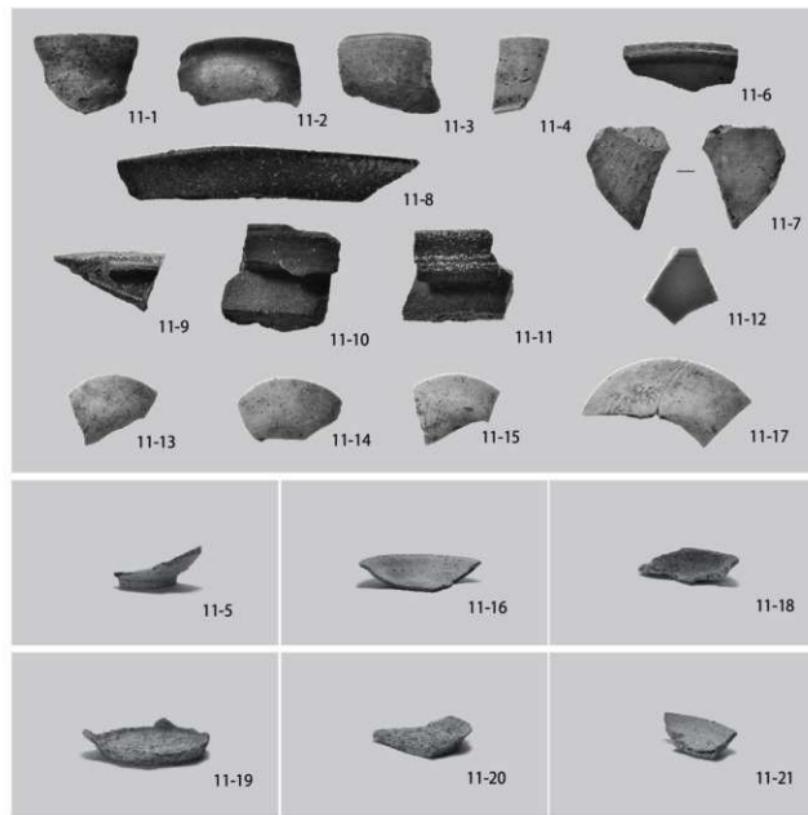
2区遺物包含層出土遺物(1)



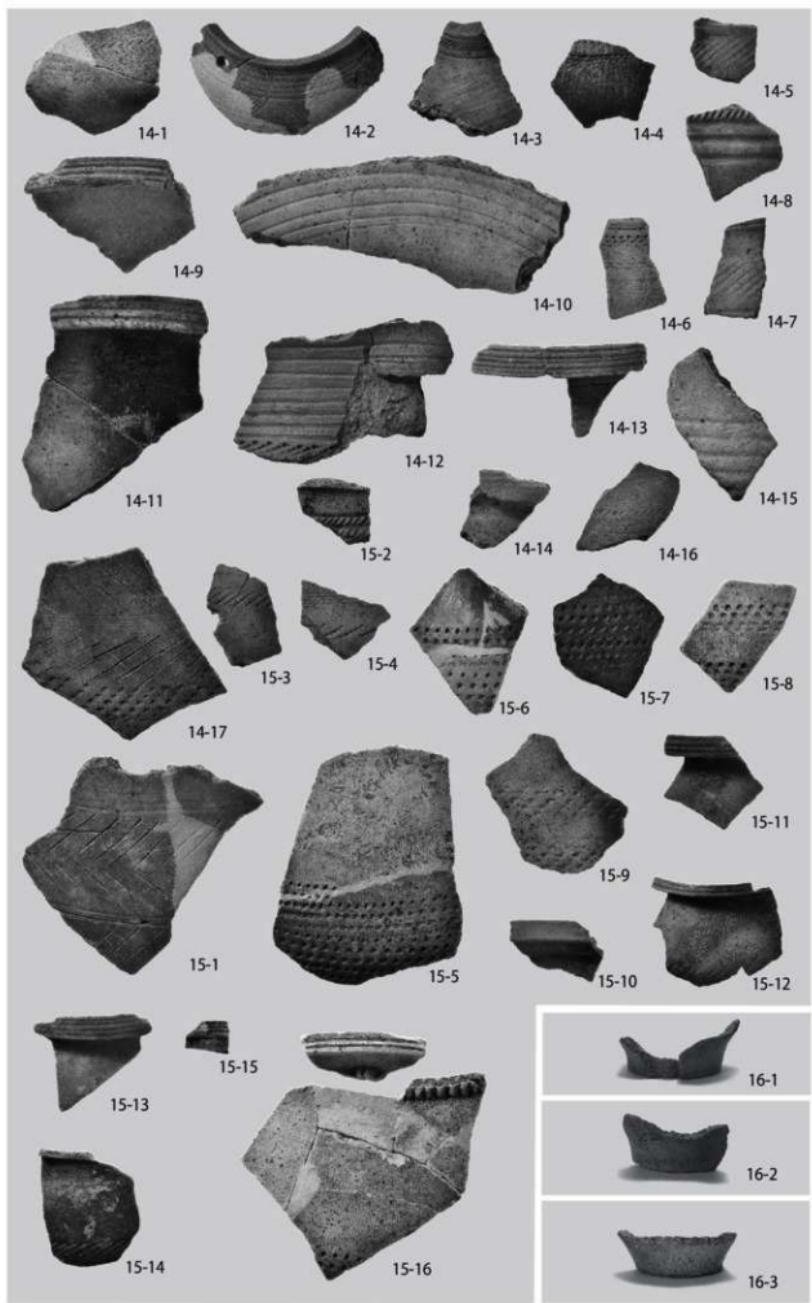
2区遺物包含層出土遺物(2)



2 区遗物包含层出土遗物 (3)

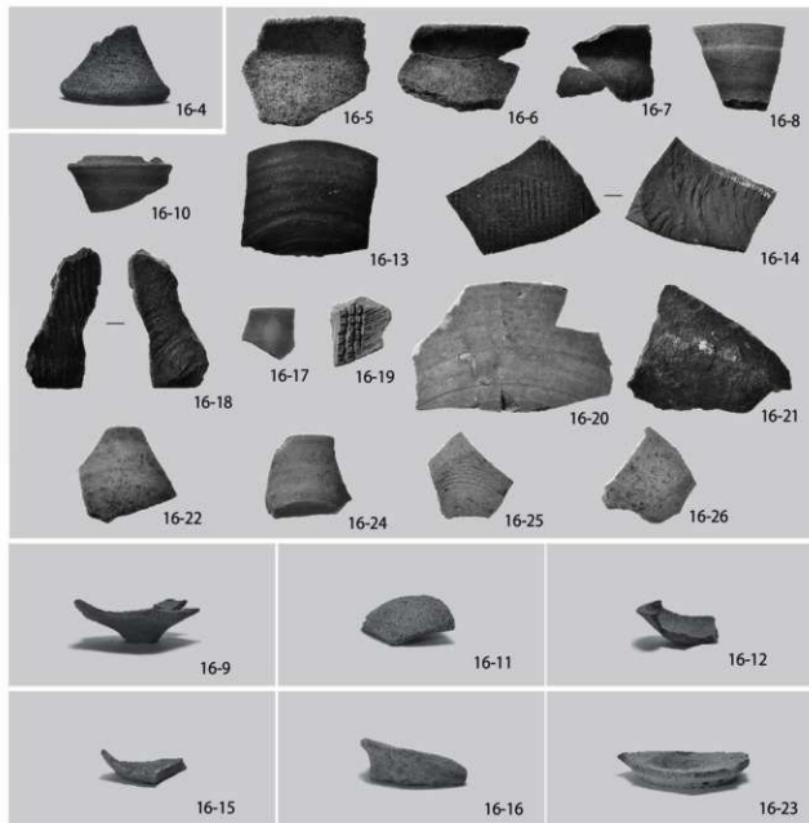


2 区遗物包含层出土遗物 (4)



1区遺物包含層出土遺物(1)

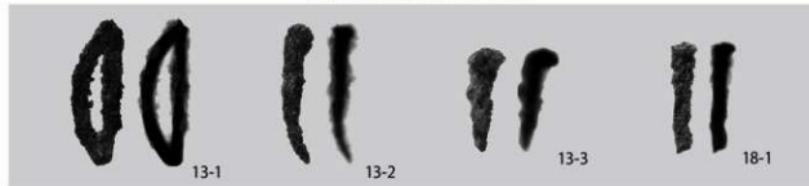
図版 9



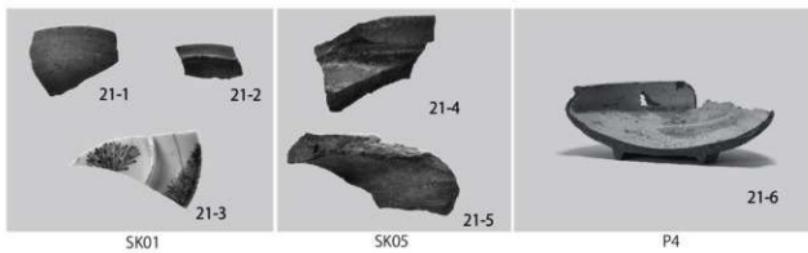
1区遺物包含層出土遺物 (2)



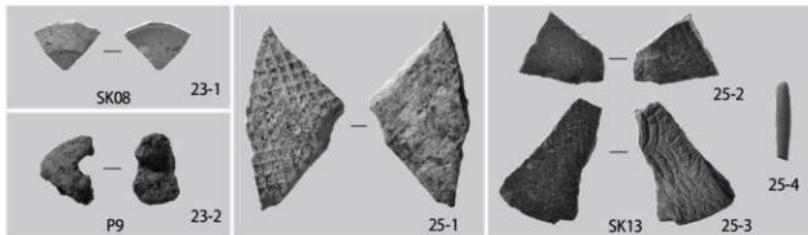
遺物包含層出土 朝鮮半島系土器



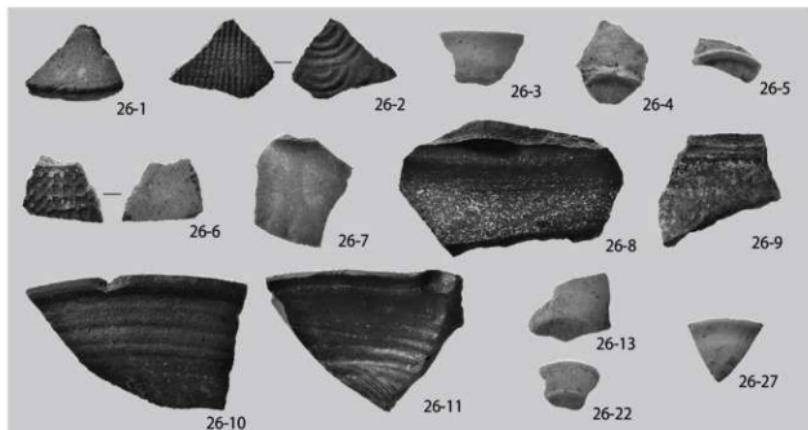
遺物包含層出土 金属製品 (右側は X 線写真)



1区1面7・8SP 遺構出土遺物



1区1面1・2SP 遺構出土遺物



26-15

26-17

26-16

26-26

26-21

26-24

26-25

26-23

26-19

26-20

26-12

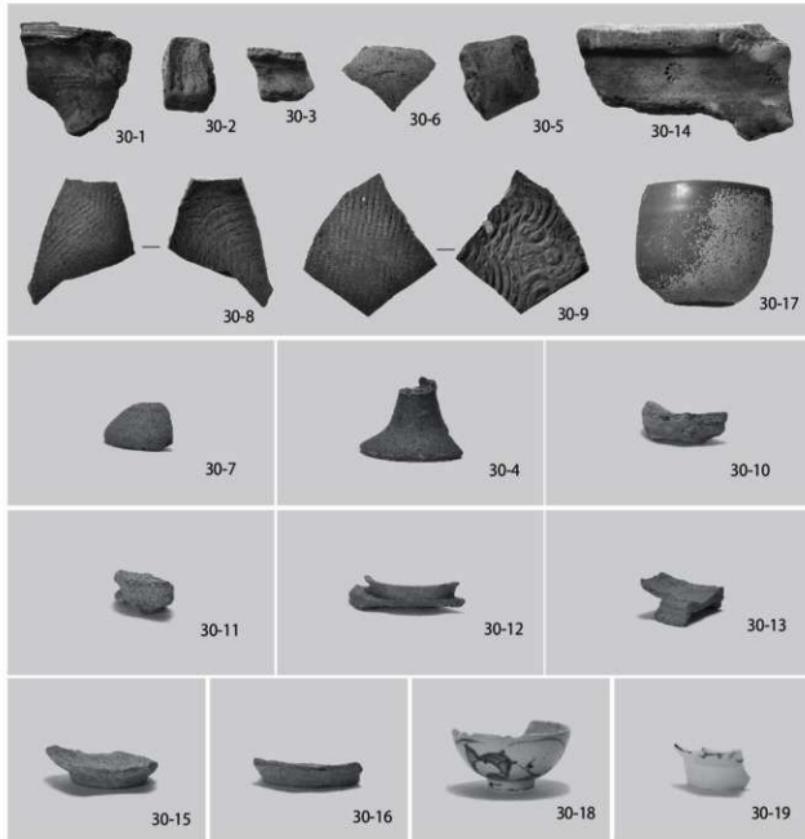
26-14

2区1面より上層 出土遺物(1)

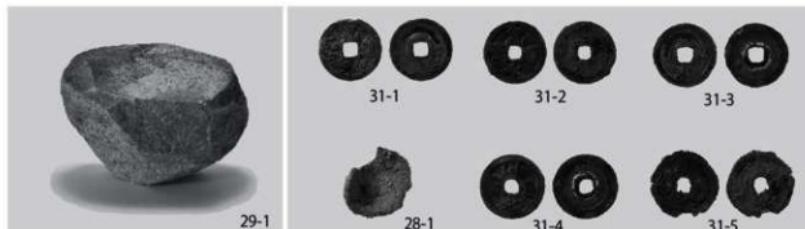
図版 11



2 区 1 面より上層 出土遺物 (2)



1 区 1 面より上層 出土遺物



2 区 1 面より上層出土 石製品

1 区 1 面より上層出土 金属製品

報告書抄録

ふりがな	もりやしきいせき						
書名	森屋敷遺跡						
副書名	穴道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ	第176集						
編著者名	徳永桃代 渡辺正巳 徳永隆						
編集機関	松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 まちづくり文化財課 TEL:0852-55-5284 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 埋蔵文化財課 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 埋蔵文化財課 TEL:0852-85-9210						
発行年月	2016(平成28)年7月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
もりやしきいせき 森屋敷遺跡	まつえし 松江市 しんじょうし 穴道町穴道 885-3ほか	32201	H-332	35° 24' 30" 132° 54' 29"	2015.10.21 ～ 2015.11.24	302.4 m ²	進入路 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
もりやしきいせき 森屋敷遺跡	集落遺跡	弥生時代 ～ 近世	土坑 溝	弥生土器、土師器 須恵器、陶器、磁器	弥生中期土器が多く出土。 朝鮮半島系土器が出土。		
要約	森屋敷遺跡は松江市穴道町穴道に存在する遺跡である。 弥生中期から近世にかけての遺跡で、特に弥生中期土器、中世の遺物が多く出土している。 周囲の遺跡で、ここまで多くの弥生中期土器が出土したのは森屋敷遺跡が初めてである。 このほか、塩町式系土器、朝鮮半島系土器など他地域との交流を示す遺物が出土しており、森屋敷遺跡が古くから交通の要衝であったことを物語る貴重な成果を得た。						

松江市文化財調査報告書 第 176 集

穴道複合施設進入路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

森屋敷遺跡

平成 28(2016) 年 7 月

編集・発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印 刷 千鳥印刷株式会社
島根県松江市春日町 344-2

